

community

マンガでわかる

災害時における 転居の課題と 地域コミュニティ づくり

熊本地震・共同支援ネットワーク





もくじ

はじめに

■ 災害時の被災者の生活環境と支援の変化

■ 避難所期・仮設住宅期の課題

マンガ 未来の暮らし——創るのは私たち

解説① 仮設住宅から災害公営住宅へ転居期の課題

マンガ 阪神・淡路大震災の支援から学ぶ30年先の地域づくり

解説② 災害公営住宅が建つ地域住民の視点——受け入れる際の留意点

マンガ ここが、私の生きる場所

解説③ 災害公営住宅を含む地域生活の再建

マンガ 日本一のまちをつくろう——仮設住宅からの集団移転

解説④ 仮設から本設へ 集団移転での新たなまちづくり

■ 資料 熊本県内15市町村で「地域支え合いセンター」が活動しています

● 熊本県の応急仮設住宅の現状

支え合い活動1 益城だいきすきプロジェクト・きままに(益城町)

支え合い活動2 平原仮設住宅(熊本市南区富合町)

■ 参考資料

■ 教材アニメーションの使い方

1 2 3 9 30 31 51 53 74 75 89 90 92 93 94 95 96

※災害公営住宅を「復興住宅」「復興公営住宅」と表現する場合がありますが、ここでは「災害公営住宅」と表記します。



はじめに

2016（平成28）年4月14日の熊本地震の発災からまもなく1年。避難所から応急仮設住宅等への転居や自力再建、さらには災害公営住宅の建設など、復興に向け被災者の生活支援が進められています。熊本地震では、東日本大震災等での経験から新たに「地域支え合いセンター」を被災市町村に設置するとともに、それを県域でサポートする「地域支え合いセンター支援事務所」も設置するなど、縦割りになっていた被災者の生活支援策の一体化が図られるとともに、体制が強化されました。

本書は、熊本地震のこれからの生活復興の過程で課題となるであろう「応急仮設住宅からの転居期」や「新しい地域でのコミュニティづくり」などにおいて、官民の関係者の参考になるものとして、1995（同7）年1月17日の阪神・淡路大震災、2004（同16）年10月23日の新潟県中越地震、2011（同23）年3月11日の東日本大震災などの経験をもとに、中高生などにもわかりやすいよう、マンガ仕立てでまとめたものです。

東日本大震災の発災から7年目に入った東北では、災害公営住宅の建設や防災集団移転促進事業が進むなか、被災者の転居によって、新たなコミュニティ形成の支援や、新生活の立ち上げ支援が必要となっており、災害公営住宅には、震災で自宅を失い自力での再建が難しい人たちが入居します。仮設住宅からの退去は、「被災者の自立」を意味するだけでなく、新たな生活支援の始まりも意味します。入居者は、「被災者」という立場を脱却して、恒久的な住宅に引っ越せる喜びとともに、新たな地で一市民として生活を築くことへの不安も抱えています。災害公営住宅が建ったある地域では、「過疎地にこんな大勢の人が引っ越して来

てくれたのだから、歓迎しなければ」と交流会を開き、入居者と地域の人が友だちになる機会につなげました。災害公営住宅の入居者と周辺地域の人がどのように関係を築くかは、その地域が今後のまちづくりをどのように考えているかにも反映されます。この機会を好機ととらえ、安心・安全な地域生活を築くべく、一緒に考え、活動をもとにする契機となれればと思います。受け入れ先の地域の自治会長や民生・児童委員などにとっては、一度に多くの人が引っ越して来るため、地区の社会福祉協議会や地域包括支援センター、被災者を支援する各種支援員などと連携して、入居者が地域の一員としてなじめるように働きかける工夫が求められます。

阪神・淡路大震災の際に建った復興（災害）公営住宅のなかには、22年を経た現在でもなお入居者に軽度の生活支援を行う生活援助員（LSA）などが配置されており、入居者の加齢に伴い高齢化率は入居時の倍となっており、自治活動の担い手がいないという地域課題も出てきています。また、仮設住宅での顔なじみの支援者が、復興公営住宅の支援者に情報をつなぐ仕組みがなく、入居者の新生活での孤独感・孤立感を深めたという反省もありました。東日本大震災の集団移転地域のなかには、何度も話し合いを持ち、行政のサポートも受けながら、住民が主体となって新しいコミュニティづくりに取り組んでいるところも出てきています。本書をつうじて、受け入れ先の地域の方々と転居する被災者がともに手をつなぎ、豊かな暮らしを実現する地域づくりにつながることを期待しています。

2017（平成29）年3月

熊本地震・共同支援ネットワーク

災害時の被災者の生活環境と支援の変化

本冊子は、①仮設住宅～災害公営住宅への転居、②災害公営住宅への転居後の様子、③災害公営住宅を含む地域生活の再建、④集団移転とコミュニティづくりの4つのステージについて、課題と支援のあり方をマンガで解説しています。災害復旧期（応急・救助期）については、3～8頁に課題を整理しました。いずれの時期においても、地域づくりの視点は欠かせないたいせつなポイントです。

下の図は、発災からの時間の流れに沿って、生活の場の移り変わりを示したものです。なお、教材用アニメーションもつくりましたので、併せてご活用ください（96頁参照）。

平常時

発災

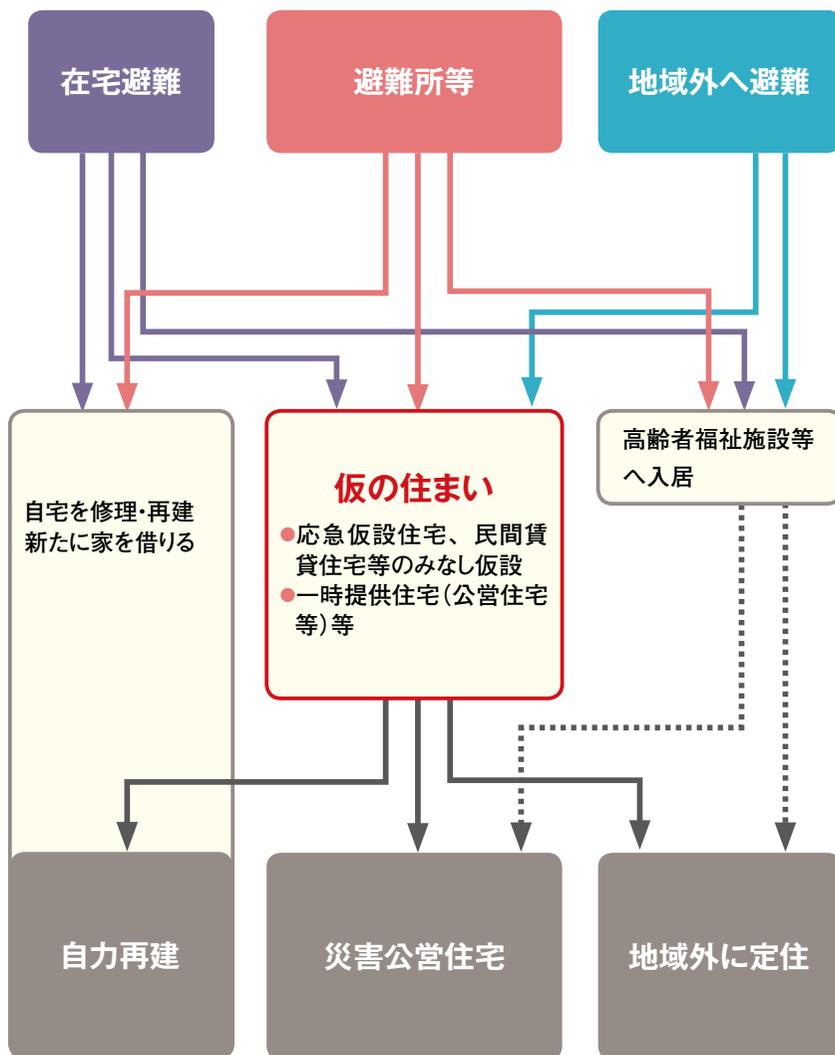
災害復旧期（応急・救助期）

生活支援期（復旧・復興期）

生活支援&地域復興再生期

平常時

地震発生



地域コミュニティや支援の手をつなぎ続ける

避難所期



避難所期・ 仮設住宅期の課題

避難所期に共通する課題

●物流がとどこおり、生鮮食品や生活用品が手に入らず避難者の生活に影響を与えた

●最初の1月くらいガソリンがなく、支援団体も満足に活動できないところが多かった

●時期によって、被災地で必要なものが変わっていくので、支援物資とニーズが合うまでにタイムラグが生じた

●津波により、海産物等が野外に長期間放置されたりしていたため、最初の夏にとんでもない大きさのハエが大発生した

●最初の2週間ほどは津波被害のためでもあるが、車のパンクが多く発生した



発災後は、避難生活が始まります。自宅での生活ができるようであれば、引き続き自宅で避難生活を送りますが、自宅に居住できなくなった場合は、避難所での生活が始まります。

その後、災害によって住居を失い自力で確保できない人に向け、応急仮設住宅が提供されます。応急仮設住宅での生活は原則2年ですが、東日本大震災のような大規模な災害の場合は、その供与期間が延長されています。ここでは、東日本大震災の経験から、避難所期と仮設住宅期の課題について抽出します。

避難所期

避難所での課題

●子どもや障害者などへの配慮がされず（声を上げたり、騒がしかったりしたため）、日が経つにつれ、避難所にいたたまれなくなり、車上生活やよそへ転出する人が多かった

●子どもが遊べる場所がほとんどなかった。遊んでいると、周囲の大人に「うるさい」と怒られた

●大人が自宅の片づけや、今後の生活の手配で出かけることが多く、子どもが放置されがちだった。心に傷を抱えた子どもも多く、子どもの心のケアの問題は大きな課題となった

●子どもによる津波遊びが大人のストレスとなり、結果子どもたちが怒られ、さらに子どもたちにもストレスがたまることとなった（本来、津波遊びは子どもの心のバランスをとるために必要なこと）

●屋外にトイレが設置され、屋外に出ないとトイレに行けないことも多く、特に夜間などは、女性にとって厳しい（危ない）状況もあった

●簡易トイレは和式である場合があり、障害者や高齢者にとっては介助が必要な場合が多かった

●トイレに行きにくいため、高齢者は水分補給を抑え、結果として脱水症状になりやすい状況だった

●集団生活のため、インフルエンザ等の感染症予防が大きな課題となった

●配給食糧は、おにぎりやパンなどの炭水化物が多く、野菜類等が不足しがちで栄養が偏っていた

●かなりの期間、お風呂に入れない（入れるところが限られる）ことが衛生面、心理面で問題となった

●プライバシーの問題があった（女性の着替えや洗濯もの干しも含め）
↓のちには、かなりの避難所で段ボール等でパーティションが設置されたが、最後までパーティションがなかった避難所もあった



着替えのスペースをつくった避難所

避難所での課題

- 自治組織がつくられたところもあつたが、役職につくような能力が高い人ほど、早く避難所を抜けて自立再建していき、自治組織が機能しなくなるところも多かった
- 避難所に届く救援物資が、避難者全員分ないという理由ですつと放置され、結局活用されない(そして避難所閉鎖)ということもあつた。……悔しかったという声があつた
- 避難所統合を行った際、避難所でのコミュニティで多くの軋轢あつれが発生した。新たな人間関係になかなか馴染めなかつたなどが原因か
- 人数が多い避難所は身動きがとれず、高齢者が動けない状況になりがちで、結果、高齢者のADL日常生活機能が落ちていく様子が多く見られた。高齢者向けに、内外にサロンのような場が必要だつた
- 話題にのぼる避難所、TV報道された避難所(大規模避難所に多い)に支援が集中した
- (初〜中期)医療チームの巡回が、小規模避難所には来なかつた
- 支援に悪い意味で慣れてしまう人が出てきた(たとえば、できることまで支援に頼るとか、物資をもらうのが当然といったもの)
- 避難所として使用した施設が管理上自由に使えず、自立を阻害したところもあつた
- 避難所の窓口職員が日替わりだつたり、外部支援者が中止になつたところでは、課題の改善が進まず、課題を残した



物資配布会



移動絵本・おもちゃの図書館

避難所期

福祉避難所での課題

- 震災前から福祉避難所として指定されていても、それが関係機関に周知されておらず、震災直後に福祉避難所として機能しなかった
- 福祉避難所の福祉施設に、震災後、周辺の住民が避難して来てその対応に追われ、福祉避難所として機能しなかった
- 入所系の福祉施設が福祉避難所指定されていた場合、入居者に被災後の要援護者が加わるため、施設定員を大幅に超える（150%）人を受け入れることに。そのため、①生活環境が厳しくなった（余裕スペースがなくなる、食事量等の制限）。②ケアスタッフに過大な負担がかかることになった
- 震災後、一般避難所から新たに福祉避難所に指定されたところでは、要援護者と一緒に避難していた家族が、要援護者と離され、別な避難所への転出を強制されたケースがあった
- 医療系スタッフが管理していた福祉避難所では、ケアの効率等が優先され、プライバシーや生活の場としての機能が軽視されがちだった
- （避難所と同じで）感染症予防に細心の注意を必要とされた。しかし、震災直後では、水道が使えないところが多く（復旧に3か月以上かかったところも）、衛生管理に非常に苦労した

自宅避難での課題

- 避難所には役所などから来るさまざまな情報が、自宅避難者には回ってこない
- 避難所では、食料配給が受けられるのに、自宅避難者には配給がなかった
- 避難所に配給が欲しいと言っても、断られる
↓この件は、のちに改善されたが、完全に解消されることはなかった。自治体により、対応に格差があった（一部自治体は、取りに来た自宅避難者にも食糧を配給していた）
- NPOなど支援団体の支援（物資配布や炊出し、慰問など）も、ほとんどが避難所単位で行われ、在宅避難者への支援は極めて少なかった
- 1階が流されて、残った2階で生活していた人たちが多く、（自宅避難とはいえ）かなり生活自体が厳しい人が多かった



避難所期

車中泊での課題

- 避難所の駐車場で車中泊している場合と、別な場所で車中泊している場合があった

(車中泊の理由)

- 子どもや障害者を抱えていて、避難所であたたまれな
くなかった場合

- 避難所の人の多さ、プライ
ハシーのなさに嫌気がさ
した場合

- 車のほうが避難所や家(電
気・ガスが途絶えている)
より暖かいと判断した場
合

- 熊本地震では、家財やトラ
クター等の農機具の盗難
防止のため、家の横で車中
泊をする人もいた

※避難所の駐車場で車中泊

- (大きな避難所で)避難者
人数としてカウントされ
ない・されにくい↓配給数
に関わる

※それ以外での車中泊

- 自宅避難者と同じ課題

- どこでも、エコノミー症候
群の問題あり

↓むしろ、避難所で高齢者
が動かないことによる廃
用症候群のほうの問題視
されていた



仮設住宅期

仮設住宅での課題

●人間関係がシャツフルされたため、コミュニティ・人間関係を構築し直さなければならなくなった

●仮設住宅が狭いため、多人数（多世代）家族は別居を余儀なくされた

●悪い意味で支援に慣れてしまいう人が出てきた（避難所での課題と同じ）

↓自分たちでやろうとせず、ボランティアをおおとする。支援物資の質・量に文句を言うなど

●壁が薄いため、生活音が筒抜けになる。騒音トラブルが多発

●独りで家にこもり、酒に溺る中高年男性（多くの場合、被災で失職）が多くみられた

●避難所と異なり、部屋にこもられると安否確認が難しくなった

●子どもの遊び場がない。集会所で遊んでいると「うるさい」と言われて追い出される

●不便な立地にある仮設住宅が多く、車がない人にとって生活が厳しかった（暮らせなくて出て行った人もいた）

●結露の発生

●仮設住宅住民と元からの近隣住民とのトラブル（駐車スペースや騒音）



みなし仮設での課題

●民間アパートなどに点在して生活しているため、避難者としてカウントされにくい。そのため、支援情報が届かず配給などの支援も手薄だった

●追い詰められた状況下で、自分の力で自ら生活を築かなければならなかったみなし仮設と、多くの支援が届いた応急仮設住宅との支援格差

●みなし仮設を選んだ理由は、応急仮設住宅の建設を待つことなくすぐに入居できることや、子どもや障害者、病人、ペットを抱えていて、応急仮設住宅では生活しづらい、通勤・通学の交通の便など

●福島第一原発事故の影響で、被災者に偏見をもつ人がいて、周囲に被災者であることを黙っている世帯もあった

●応急仮設住宅以外にみなし仮設という選択肢ができて、自主的に県外に避難することが可能になった。これにより被災者を受け入れた自治体が彼らの生活をサポートするなど、全国的な支援が展開され、自治体による支援格差も生まれた

未来の暮らし 創るのは私たち

原案 永坂美晴

画 スプラウトデザイン

★このマンガをもとにしたアニメーションが作成されています。

使い方については 96 頁を参照してください。



※この物語はフィクションです。実在の場所、人物とは関係ありません。

「災害公営住宅」すかあ

元漁師の太郎さんは
ひとり暮らしの80歳
津波で奥さんを
亡くしました



一時身を寄せていた
息子の家も
けんかをして
出てきてしまいました



お父さん!

おじい
ちゃん



おっと!

いいところよ

恵子さんは
ああ言うけれど

ちゃっけえ字は
見えねえし

足腰は
弱ったし

新しいところは
今までのなあ...





太郎さん
いるー？

入るわよ

この前の

災害公営住宅の
パンフレット
見てくれた？

んー



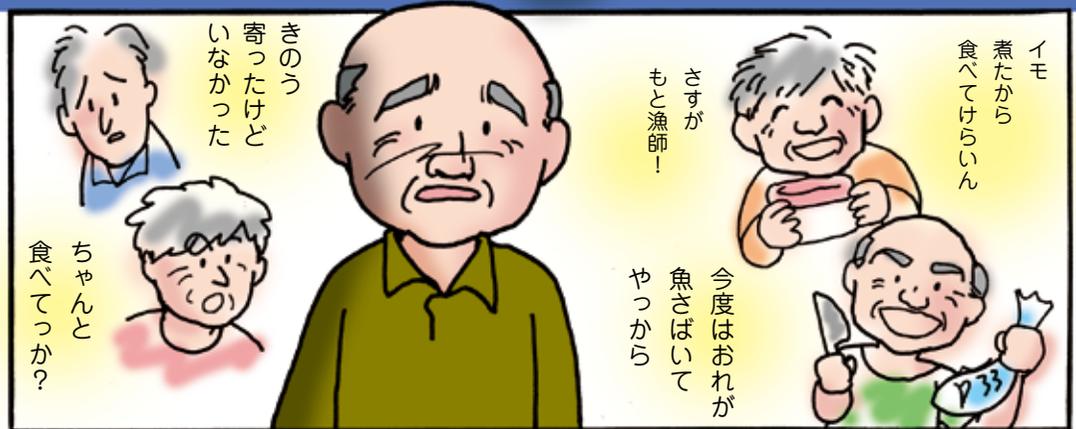
自宅を失った被災者に
自治体が用意する賃貸住宅が
災害公営住宅です
高齢者や障害者等の
生活に困難を抱えた
多くの被災者が
仮設住宅から転居してきます

静かだし
6階建てで
バリアフリーに
なっていて

これから
ずいっと
住めるのよ

オレは
行くのやんだ！

ここさ
あと数年
住まわしてけれ
ほしたらここで
ポックリ
いぐっちゃ





一方、新しく
災害公営住宅が建つ
荻田町も
とまどっていました

もうすぐ
だな

民生児童委員
池田さん

荻田町・自治会長
藤井さん

どう迎えたら
いいん
だろうねえ

この住民と
うまく
やっついていける
だろうか

静かな住宅街に
あんな大きな
集合住宅が
できたら



災害公営住宅が
できたからと
いって
特別なことを
しなくても
よいのでは
ないでしょうか

社会福祉協議会
高木さん





マップに入れるもの
学校 役所 交番 公園
病院 銀行 コンビニ
公園 トイレ

他には…

ここは
桜の名所

この川は
危険だわ

それから…

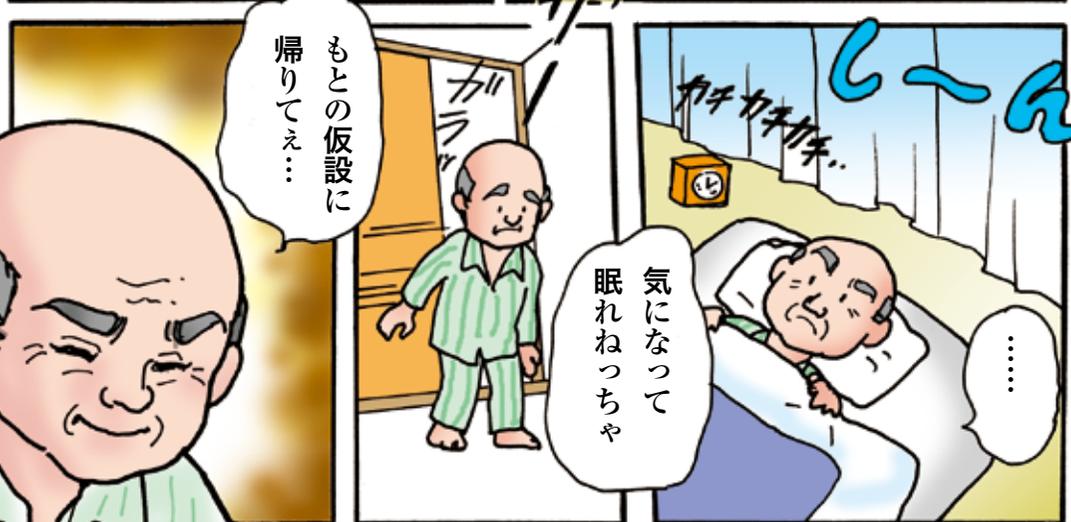
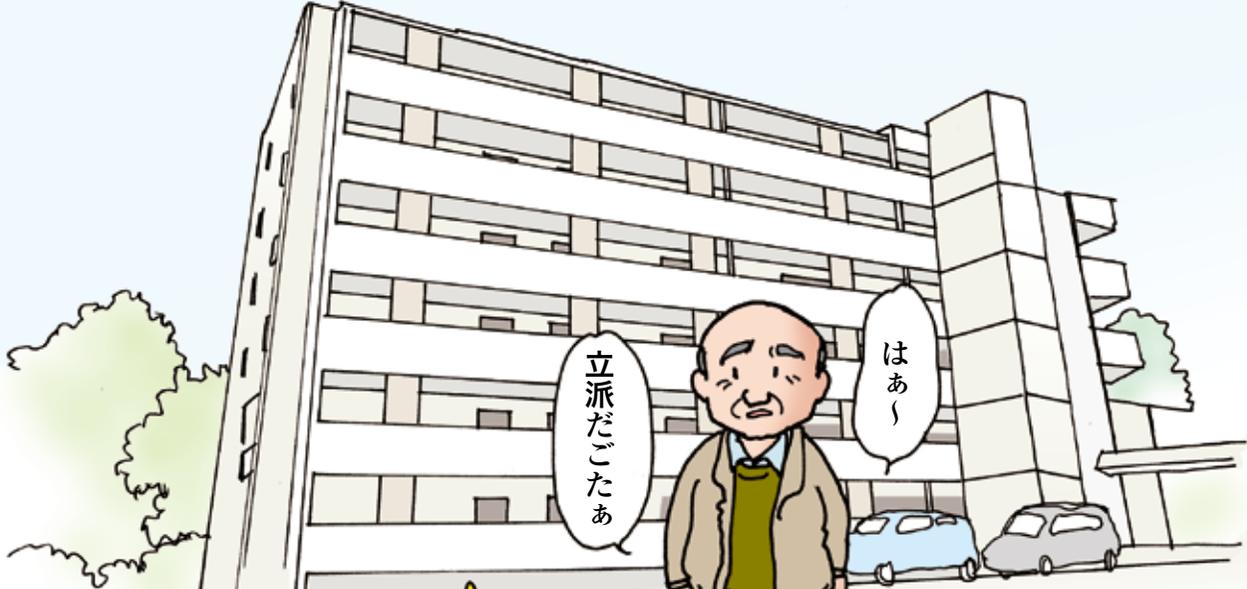
このパン
おいしいのよ

この酒屋は
配達して
くれるよ

災害公営
住宅の人
だけじゃなくて
私たちも
集まる場所が
ほしいわ

じゃあ一緒に
楽しめる場所を
作りましょう

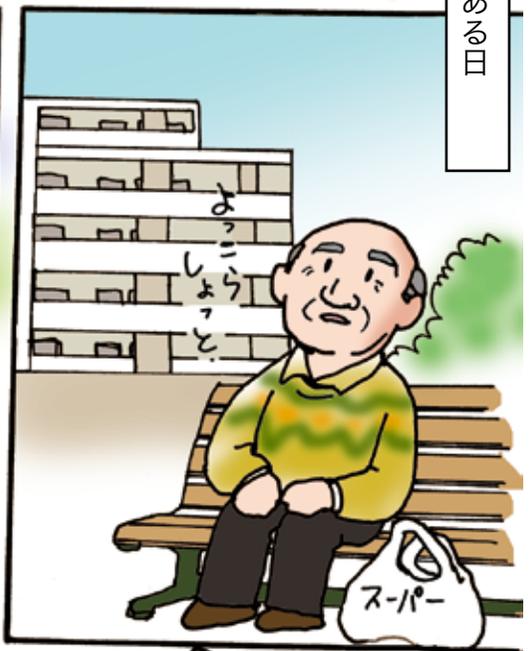
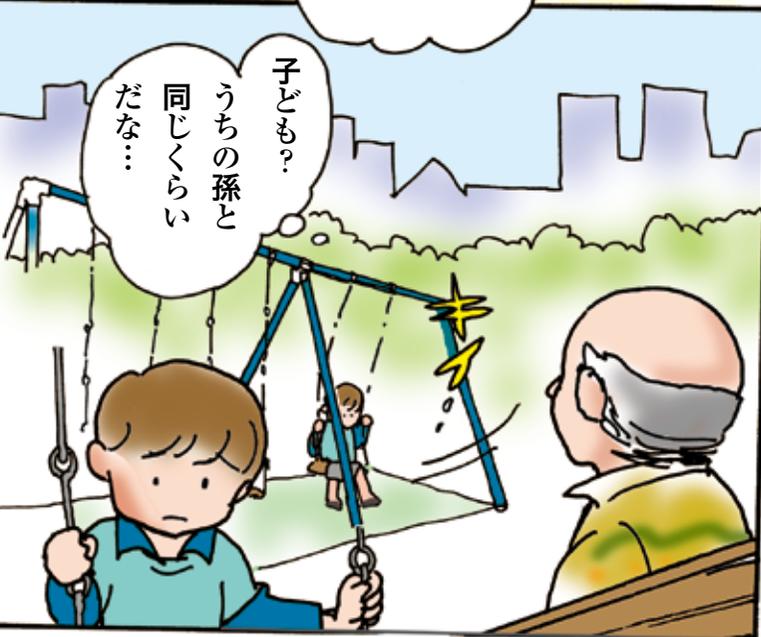
そしてとうとう
太郎さんの
引っ越しの日が
やってきました

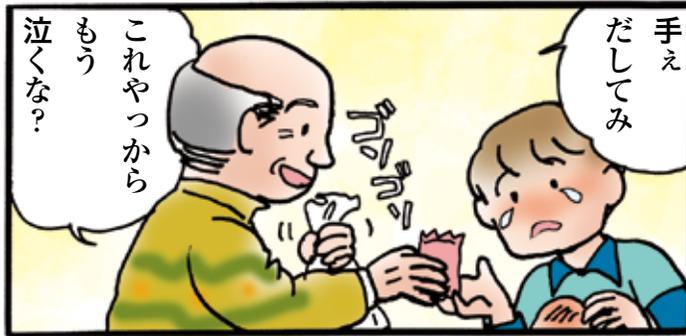


翌日



ある日





そして
1か月ほど
たったある日

恵子さん

山川仮設住宅
同窓会のお知らせ

山川仮設住宅
自治会長の
佐藤さん

懐しい
よし
絶対
行くべ!

そして
同窓会当日

山川仮設住宅同窓会



太郎さん!



太郎さん
元気だった?!

恵子さん…

支援員の
アイ子さんに
太郎さんの
ことは
よく
頼んでるから



最近のことも
聞いているのよ

メールや
電話で
連絡
とりあってる
のよ

えっ!!

オレのこと
そんなに
気にかけて
くれたのか…

それから
同窓会は

年に2回
定期的に開催
されました

太郎さんがここにきて
3か月がたちました

太郎さん
変わらない？

山本さん一家
ともすっかり
お友だちに
なりました

最初は
少なかった入居者も
今では大勢に



いつも
すみませんね
ありがとうございます
ございます

よかったです
これは
うまそう
いただきます



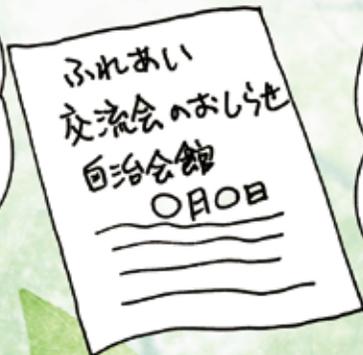
知らねえ人は
苦手だな…

交流会？



そうだ
太郎さん
今度開かれる
「ふれあい交流会」に
行って
みませんか？

荻田町の自治会が
中心になって、
地域の人や
支援員が



災害公営住宅に
やってきた私らを
地域の一員として
歓迎してくれる
そうなんです

うちもみんな
で行くんです
行きましようよ



ふれあい交流会



山本さんも？



ようこそ
荻田町へ！

民生児童委員
池田さん

荻田町・自治会長
藤井さん



あんたもかい？

ガヤガヤ

え？

こちらも
漁師だった
そうですよ

皆さん
お手元に
お配りするのは
町内の商店や
ラジオ体操の
行われる公園
などを示した
地域の
マップです
どうぞ
お役立て
ください

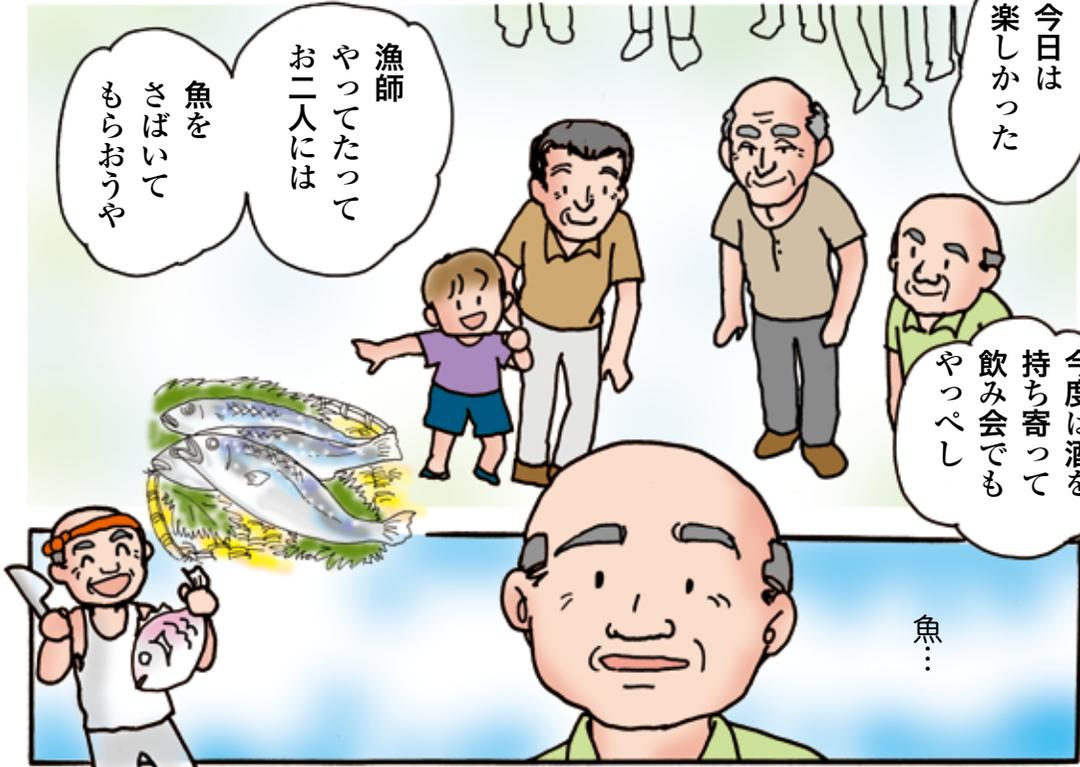


今日は
楽しかった

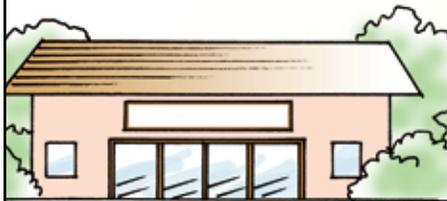
今度は酒を
持ち寄って
飲み会でも
やっぺし

漁師
やってたって
お二人には

魚を
さばいて
もらおうや



歓迎会を
きっかけに
災害公営住宅の
集会所では



自治会の
協力を得て
週一回の
「お茶っこ」が
開かれるように
なりました

はい
わかり
ました

お茶っこ
立ち上げにあたって
アイ子さんと
住民が協力して



地域住民の
意見を聞いたり

他の地域の
お茶っこを
見学したり
担い手や
財源確保について
調べたり





新聞が
たまってる

旅行
だべか？

どうしたらいいか
アイ子さんに
聞いてみつか

えっ？

入れてもらった
短縮で

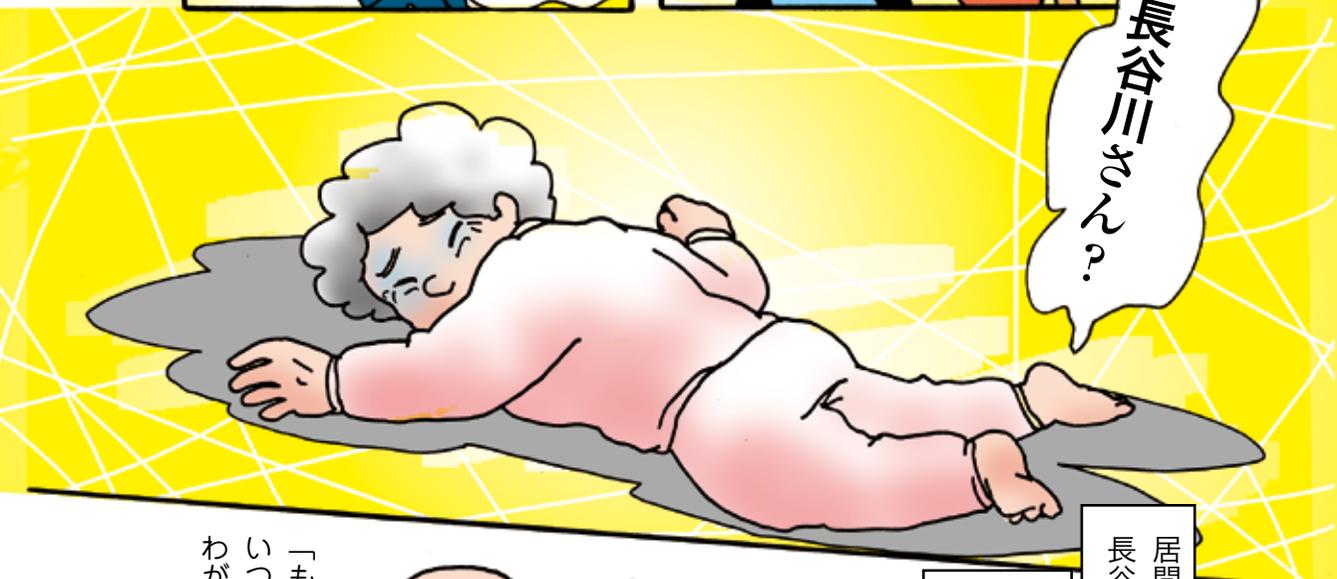
警察
じすー！



緊急連絡先に
電話しても
行き先が
わからないんです

地域包括支援
センターの
井関さんを
連れてきたわ

よ
し
し
し



長谷川さん？

居間で倒れていた
長谷川さん

幸い
命に別状は
ありませんでした

ここは
オシを含めて
ひとり暮らしの
高齢者が多い

「もしものとき」が
いつ来るか
わがねえんだ



地域ケア会議



介護家族

地域包括支援センター
井関さん

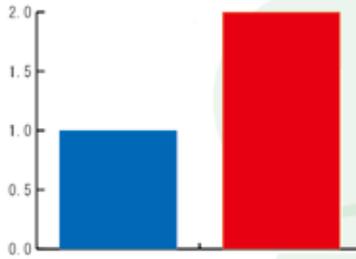
社協の課長



今回の
長谷川さんの件で
思うのは

支援員
アイ子さん

また
高齢者だけでなく
中年層の
閉じこもりがちな
独居男性も
増えています



災害公営住宅では
入居者の独居世帯は
他地域の
2倍に上ります



災害公営住宅の
班長



民生児童委員
協議会会長



萩田町自治会長
藤井さん

この問題について
相談し
定例会の議題に
あげてもらったこと
になりました

話し合いを受け
自治会長
民生児童委員
協議会会長も

介護や
ひきこもりで
出てこない
人も多い

家族と
同居
していても

お茶っこ
にも来ない
閉じこもり
がちな人が
多くて
心配

長谷川さん
だけじゃない



それらの意見を元に
自治会、老人会、
女性会、PTA
民生児童委員協議会、社協、
地域包括支援センター
行政で

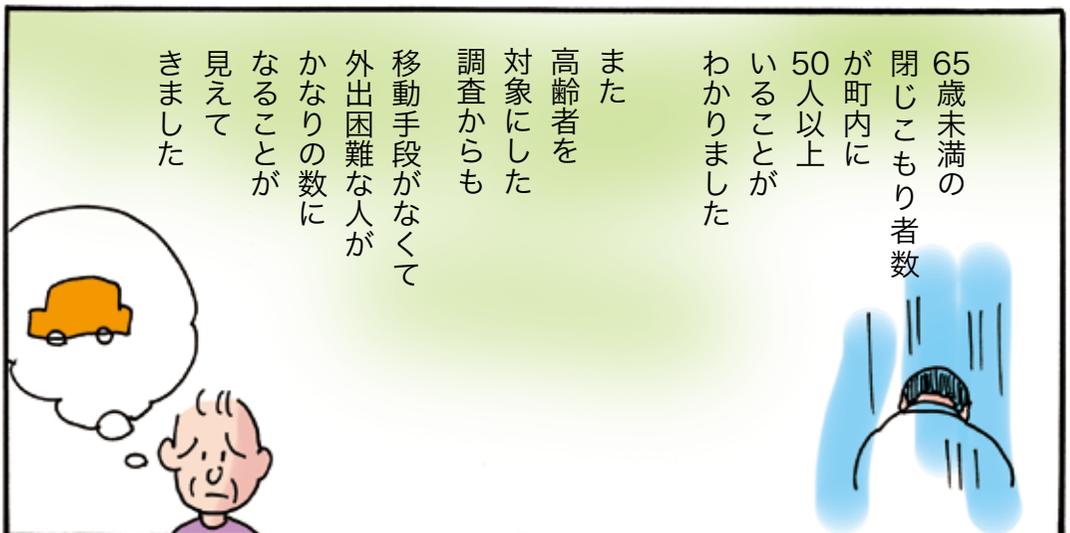
地域の見守り・
支え合い
体制づくり
に向けた
意見交換会を
開催すること
になりました



意見交換会を経て
地域の
閉じこもりの
実態調査を
実施

2か月に及ぶ
調査の結果

民生児童委員
地区社協等の
協力を得て



65歳未満の
閉じこもり者数
が町内に
50人以上
いることが
わかりました

また
高齢者を
対象にした
調査からも
移動手段がなくて
外出困難な人が
かなりの数に
なることが
見えて
きました

もっと声かけ
見守りの輪を
広げるべきだ

閉じこもりには
本人の問題も
あるのではないか

意見交換会では
いろんな意見が
出されました

民生児童委員と
地区社協と
自治会役員を
交えた
調査報告会と

閉じこもり
についての
勉強会を
開催したら
どうだろう

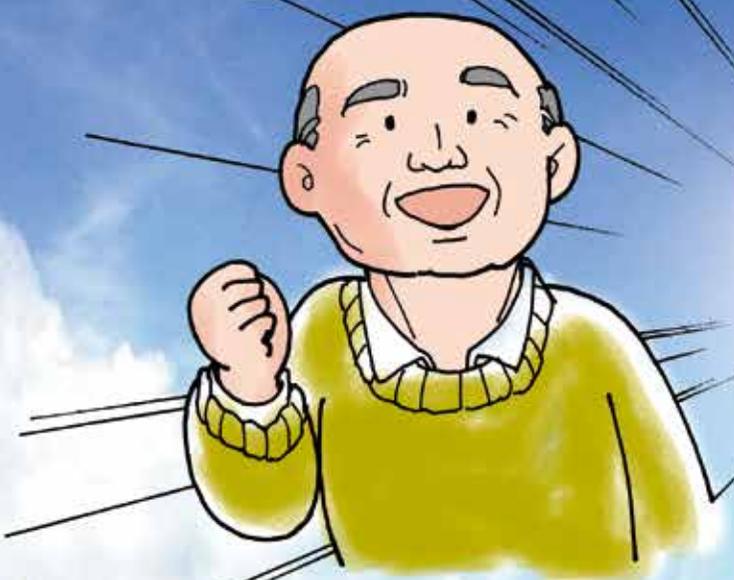
荻田町自治会長
藤井さん

太郎さんも
参加
しません？

え？

長谷川さんを
助けた
じゃない

支援される
だけじゃなく
お互いにサポ
ート
し合う第1歩
がんばって！



よおす
やってみっぺし！

あれから3カ月、
萩田町では……

太郎さんは親しくなった
山本さん家のタケシ君と
子どもの作った
折り紙などをもって

団地のお年寄り宅を
訪問するように
なっていました



ここをおすと
飛び跳ねるんだよ

ヒロシ、
懐かしいねえ

タケシ
だってば

あそこの
おばあさん
この頃ゴミ出しの
日にちを
間違えるって



太郎さん

こんにちは
いつもゴミ出し
ありがとうございます

誰かと
つながって
いる

太郎さん

また一局
やり
ましょう



誰かの
役に立てる

それが
こんなに
うれしい
なんて

これがオレの
第一歩なんだな



仮設住宅から災害公営住宅へ
転居期の課題

●大坂 純

仙台白百合女子大学教授

●被災者から一般住民への移行

仮設住宅から災害公営住宅への転居期は、被災者として生活している時期から一般住民へと移行する時期でもあります。突如の被災、その後の避難所暮らしと仮設住宅での生活では、これまで積み重ねてきた人生が否定されたり、すべてを失ってしまったと感じることもあったことでしょう。災害公営住宅への転居期は、再び新しい地域で一住民として日常生活を取り戻す準備をする時期です。

被災した人たちは、震災後、被災者という側面ばかりが注目され、関われることに疲れているという人も多くいます。しかし、被災者であることを無視されることにも違和感を覚えています。災害公営住宅への転居者を受け入れるためには、被災者という側面を理解しつつも、地域の新しい住民として受け入れることがたいせつです。

●被災者の困難を乗り越えてきた力を知ろう

被災した人たちは、何事にもがまんを強いられる生活をして

きました。仮設住宅では、水洗トイレの音にも気を遣い、深夜はトイレをできるだけ使用しないという人もおられました。元は戸建て住宅で生活していた人が多く、生活音によるトラブルははじめて経験するという人が多くいました。このような経験を重ねてきたことを理解することも重要ですが、地域住民として地域の日常に自然に溶け込むような関わりが重要です。

また、被災前の生活においても厳しい生活環境のなかで、住民相互の支え合いや生活の工夫をしながら暮らしてきた人たちも少なからずいます。支援者は被災者の弱い面ばかりを強調してしまい、被災者は支援を必要とする人として評価されがちです。

しかし、さらに厳しい生活環境を支え合うことや工夫をすることで、乗り越えるという貴重な経験をしている人たちでもあります。地域に被災者を受け入れるということは、これまでの苦労を聞くとともに、今まで体験してきた支え合いやその工夫を教えるもらう貴重な機会にもなります。受け入れる側の地域の人たちは、被災者の今までの暮らしの知恵や生活の工夫を新しい地域で共有し、地域のコミュニティづくりに活かすという視点が受け入れの第一歩となります。避難所や仮設住宅などの環境の変化に耐えて、乗り切ってきた人たちの力を新しい地域でも発揮していただくことをしっかりと意識して地域づくりに活かしましょう。また、受け入れる地域の人たちも地域の文化や伝統、地域のよい点や課題を交流のなかで、時間をかけて理解してもらるように伝えることがたいせつです。

阪神・淡路大震災の支援から学ぶ

30年先の地域づくり

協力：佐藤寿一

画：スプラウトデザイン

中央公民館

今日は
週1回の
サークル活動日

子育てサークルの
代表
リョウ子さん

橋本町
子育てサークル
「あひるの会」

リョウ子さん
災害公営住宅が
できるって
話だけど

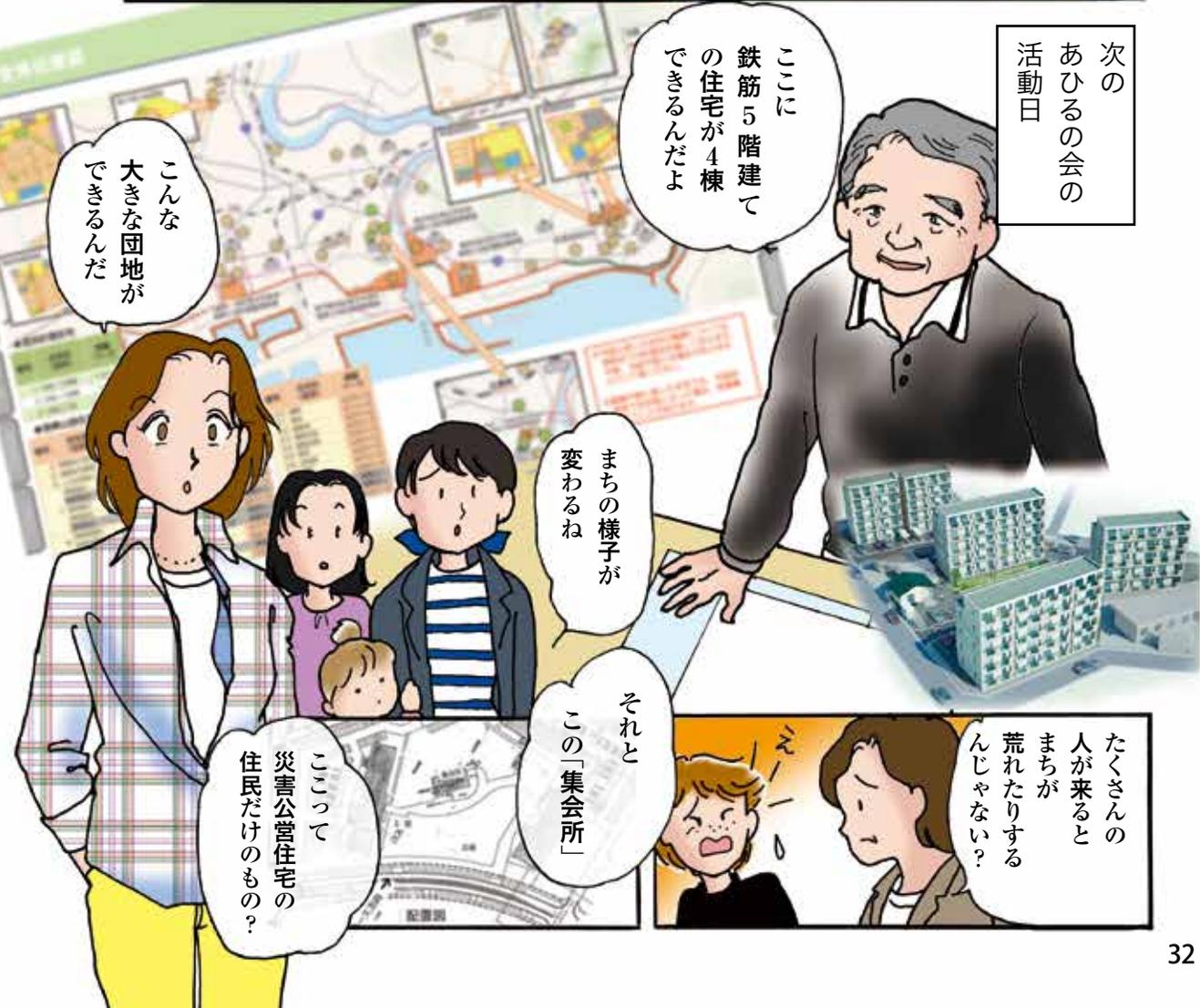
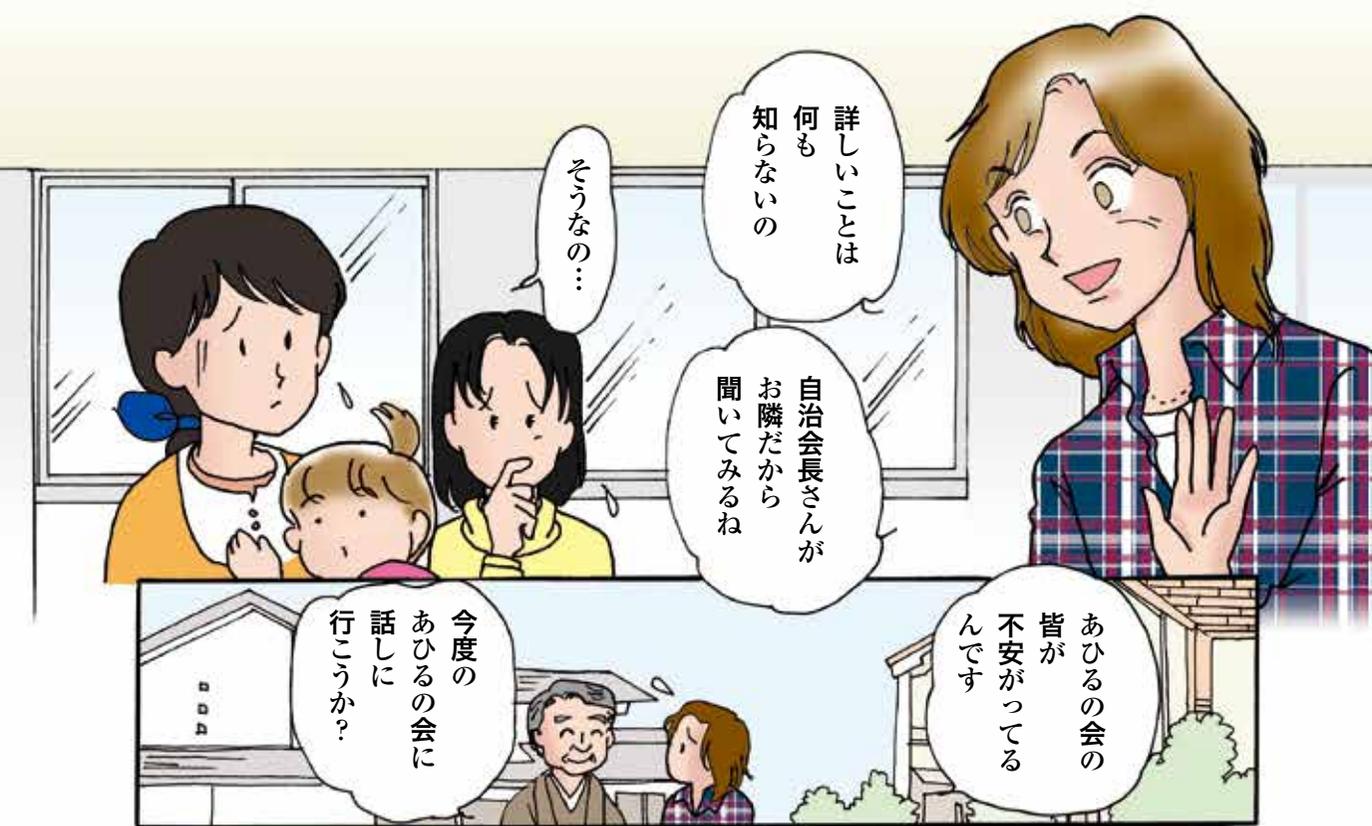
うん？

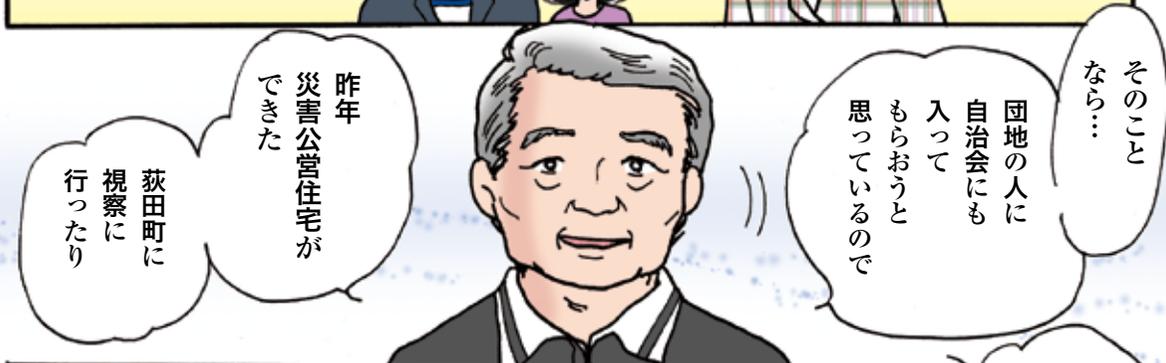
何か知ってる？

どんな人たちが
入って
来るのかしら？

車が増えて
道路が危なく
ならない
かしら？

※この物語はフィクションです。実在の場所、人物とは関係ありません。





高橋さんの話—阪神・淡路大震災のとき—

兵庫県の現状

兵庫県では



そしてあひるの会の活動日に高橋さんご夫婦が来てくれました

日時	1995年1月17日 5:46
規模	M7.3
最大震度	震度7
死者・行方不明者	6,437人
負傷者	43,792人
家屋被害(全・半壊)	460,357世帯(249,180棟)
避難者(兵庫県内) (最大時:1999年1月23日)	316,678人
仮設住宅(兵庫県内) (最大時:1999年11月15日)	88,572人(46,617戸)

阪神・淡路大震災の概要

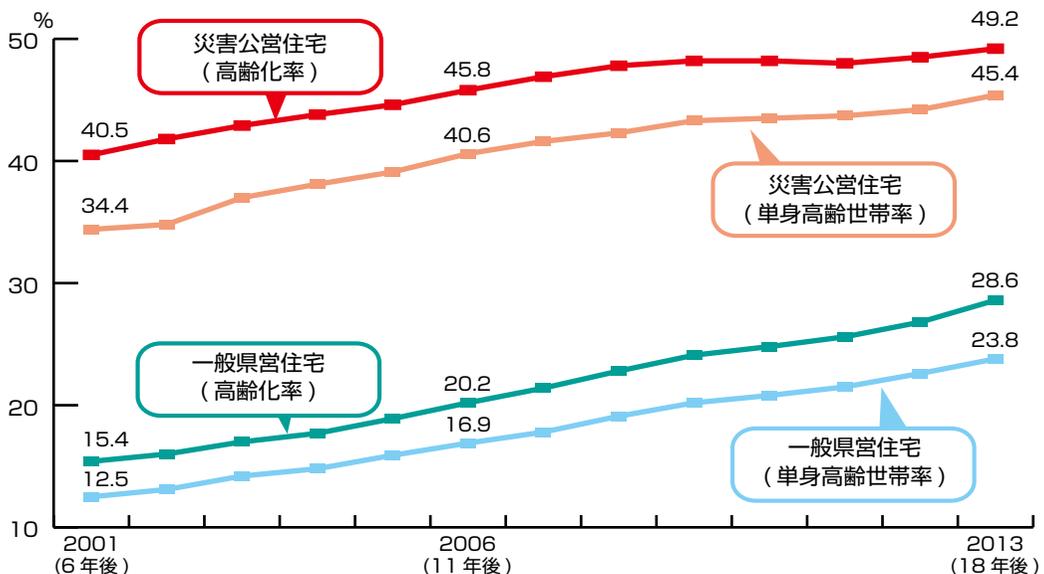
阪神・淡路大震災は、直下型地震で揺れが大きい場所の被害が甚大だったのです。兵庫県全体で6,500人弱が亡くなり、43,000人くらいが怪我をしました。46万戸の家屋が全半壊しています。仮設住宅には最大時で約46,000戸、88,000人が暮らしていました。

その1

災害公営住宅の高齢化率は一般の公営住宅の2倍近い

入居の完了時点(2001年)で高齢化率が40%、単身高齢世帯率が34%でした。一般県営住宅がその当時高齢化率が15%、単身高齢世帯率が12%ですから、それと比べれば倍以上の水準でスタートしています。それが時間の経過でどうなったかという、2013年には、高齢化率が49.2%、単身高齢世帯率が45.4%となり、半分の人が65歳を超えている状態です。一般県営住宅と比較すると倍くらいの水準を保って推移してきていることがわかります。

災害公営住宅の高齢化率の推移



2回の環境の変化・関係の分断

仮設住宅への移住:地域ごとに移転するという配慮のされた地区もあったが、ほとんどは抽選で決められ、さらに優先入居の仕組みをとったため、高齢者や障害者が集まる結果に。

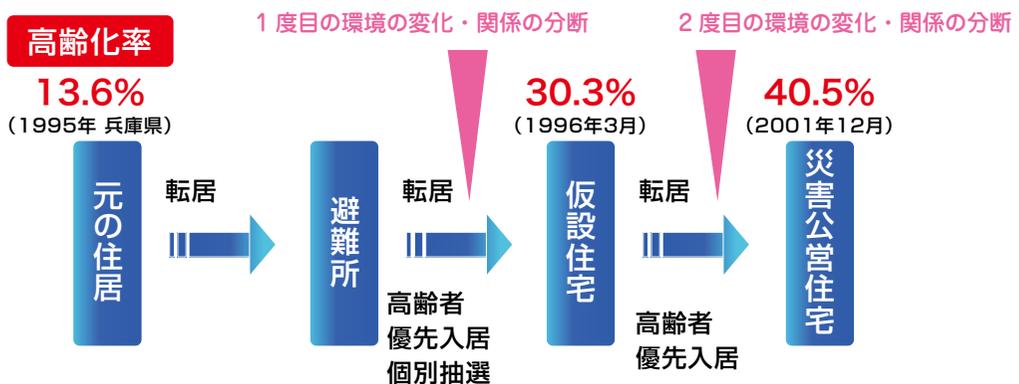
(→これが1度目の環境の変化・関係の分断)

さらに2年後には、災害公営住宅への移住が始まる。優先入居枠が決められ、仮設住宅で築いた人間関係が再び分断されることに。

(→これが2度目の環境の変化・関係の分断)

なぜこういう状況になるのかを説明します。震災が起きた当時の1995年の兵庫県の高齢化率は13.6%でした。震災が起きて、家が潰れて避難所に行く。避難所から仮設住宅に移り、1996年の仮設住宅の高齢化率が30.3%です。仮設住宅に移った段階で倍くらいになっています。5年後の災害公営住宅の高齢化率は、40.5%です。その理由は、自力で住宅を確保できた人は、順に引っ越していくため、それが難しい人たちだけが仮設住宅に残ったからです。さらにそのなかから支援の必要な人が優先的に災害公営住宅に移っていく。支援の必要な人たちが集まって住む環境をつくっていく、ということになっていったわけです。

高齢者の課題を生み出した要因



- ① 転居を繰り返すたびに高齢化率が高くなっていった
- ② 転居を繰り返すことで住民同士のつながりを失っていった

災害公営住宅の 見守り支援のしくみ

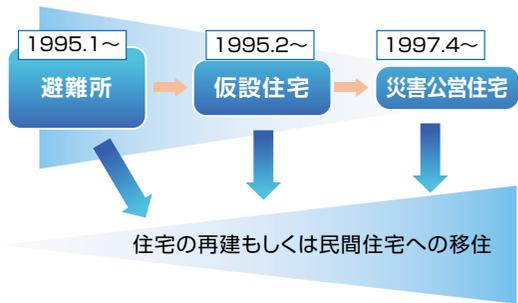


宝塚市の災害公営住宅への対応と現状

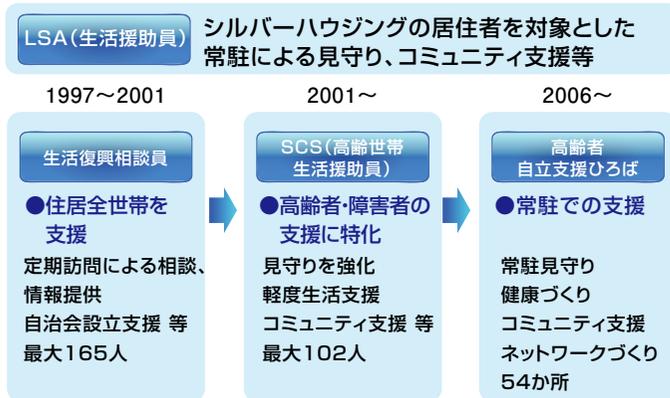
1995年の発災から、仮設住宅・災害公営住宅へと生活の場は変わっていきましたが、その間にも住宅の再建や民間住宅への移住など、経済力・体力のある人たちは自立していきました。

最終的に災害公営住宅に移住したのは、経済的・身体的などの理由により自立したくてもできなかった人たちでした。

避難所～仮設住宅～災害公営住宅の流れ

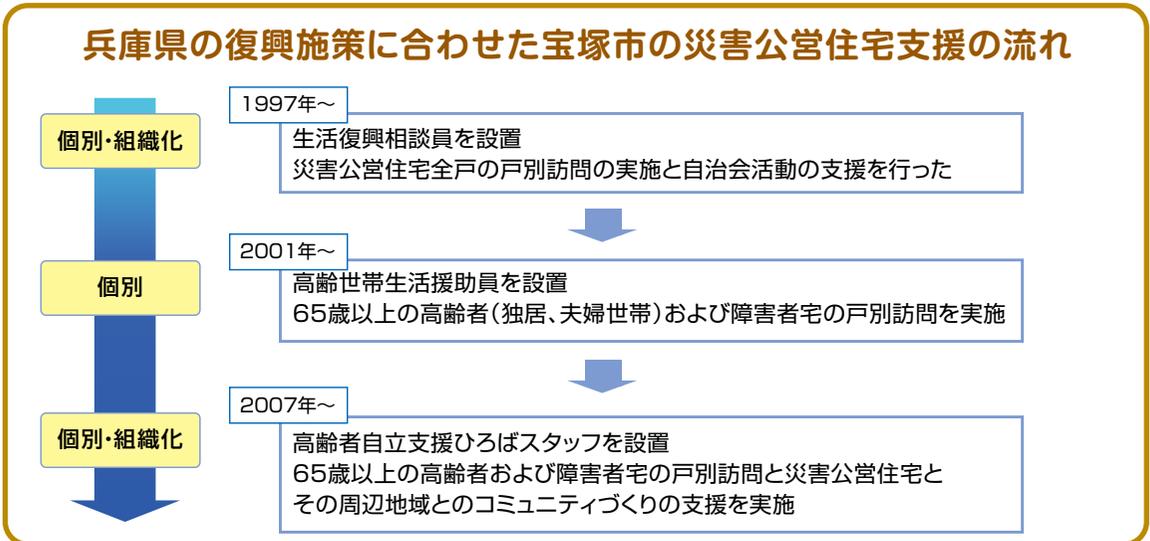


災害公営住宅への見守り支援



兵庫県の災害公営住宅への施策は、1997年の生活復興相談員から始まりました。支援当初は、個別支援と自治会への支援、地域とのつながりづくりなどの組織化の支援を行っていましたが、2001年からは個別支援のみになり、2006年には再度個別支援とコミュニティづくりの支援を行うようになりました。これらの施策はすべて年限のある施策で、期限が迫ると再度延長することを繰り返してきました。

兵庫県の復興施策に合わせた宝塚市の災害公営住宅支援の流れ



入居から5年後

高齢化が進展(高齢化率50%近くに)、
軽度の生活支援で暮らしていた人に介護が必要になる、など

➡ 重度の人は介護保険などの一般施策で対応する

- ・ 周辺住民には、十分な説明もないままに住宅がポンとできた
→ 積極的に反対はしにくい、気持ちよく受け入れられないという住民感情があった。
その結果、住宅住民との軋轢あつれきが生まれた地域もある。

10年後

抽選入居の結果、10年経ってもなじめない人がいる
(無理矢理連れてこられたという思いが根底にある)

災害公営住宅は、一定の期間が過ぎると一般の市営・県営住宅になる。その後の新たな入居者は一般の住宅への入居が困難な人(所得制限、ひとり暮らし高齢者、障害者など)が多くなる。また、中年の男性独居者でアルコール依存や生活苦による自死が増えた。この人たちは、高齢世帯生活援助員の見守り対象外だった。

- ・ 時間が経てば経つほど、地域との差が顕著になる

➡ 10年も経てば地域では震災は過去の出来事になりつつあるが、
災害公営住宅にはまだ生活を取り戻せない人たちがいる

- ・ 抽選による入居の結果が、10年経っても住宅になじむことのできない人を生み出している。
- ・ 新たな入居者も、支援の必要な人が集まるような状況になっている。
- ・ 地域と接点がなく、孤立している住宅が多い。

2005年の宝塚市災害公営住宅の状況報告より

15年～20年後

半分の入居者は、復興期の入居者ではなくなってくる

もう復興がキーワードではなくなってくる。元からいる入居者はますます高齢化・重度化するが、新たな入居者も何らかの生活課題を抱えている人が多く、支え合いや見守りが機能しなくなってくる。自治会の維持すら困難になり、自治会を解散するという議論も出てきている。

阪神・淡路の教訓

1

コミュニティの支援を最初にはできなかった結果がいまだに復興支援として災害公営住宅支援を継続している現在の阪神・淡路の状況を招いている

➡ **最初に必要なだったのが、住民同士や周辺地域とのつながりづくりだった。**

2

復興には長期的展望が必要（短期施策の繰り返しになる）

・復興施策と一般施策の担当課が異なるという行政の縦割り

➡ **復興の部署と福祉・住宅の部署が繋がらなければならない。**
復興部署では、長期的な施策の展望ができないまま、問題が出てくれば対処することの繰り返しになりがち。対症療法のため、常に実態を後追いつることになる。

3

専門的支援だけでは解決できない

・阪神・淡路では、住民と専門職が生活課題をともに考えながら一緒に解決していくという場づくりが充分できなかった。

➡ **専門職は専門職、住民は住民として動き、専門職と住民がともに考える場がなかなか生まれなかった。**

住民は専門職とどうつきあうか。

専門職は、「被災住民も周辺の住民も一つ」という視点がたいせつである。

4

支援のバトンを渡す

・仮設住宅から災害公営住宅などの転居先へ支援をつなぐ

➡ **災害公営住宅等の転居先の支援者とまったくつながらなかった。**

必要な情報を引き継ぐという発想がなかった。

仮設住宅での支援を転居先へいかにうまくリンクさせるかが重要。

高橋さんの妻
はるみさんは
当時
災害公営住宅に配置された
LSA※でした



災害公営住宅に
入居した方の
生活を支援する
活動を
していました

初めての
ことばかりで
みんな手探り
だったけど

いろいろな実践が
生まれたのよ

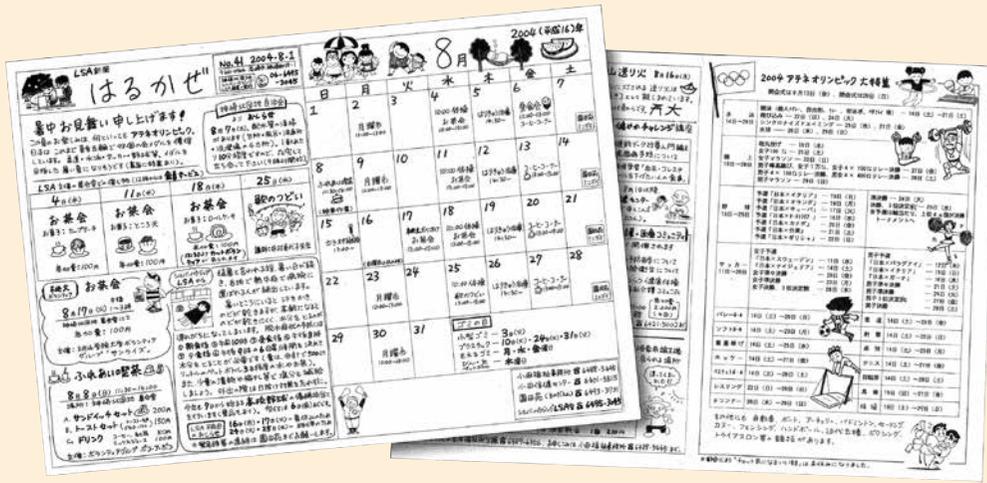
※LSA：ライフサポートアドバイザー

●事例1 「お茶会」から「会食会」へ (尼崎市 市営神崎北団地)

1997年に尼崎市に初めてつくられた災害公営住宅。仮設住宅からの入居者は、新しい機器の使い方や近隣との交流などに不安をもっていたため、LSAが「お茶会」を開催したところ、単身高齢者17人中7人がやってきました。以降、住民同士の顔合わせを目的に、月1回「お茶会」を開催することになった。

このお茶会には、仮設住宅からの引っ越しを手伝ったボランティアグループや学生が主催したものなど、さまざまなボランティア団体関わった。このお茶会で認知症の夫婦がふともらした「ここでご飯は食べられませんか?」というひとことがきっかけで「ふれあい会食会」も始まった。こうしたボランティアとの交流は、住民だけでなくLSAも元気づけることになり、災害公営住宅の入居者へのサポートに好影響を及ぼした。

また、当初は大学生がボランティアで作成したコミュニティ新聞を入居者に配付していたが、その後、名称を変えて自治会、民生児童委員、地区社協等で構成される委員会が発行するようになった。必要だと思ふものは、周囲の力を借りて、仲間をつくること——これが資源づくりの第一歩である。



事例2

ボランティアグループをつくって喫茶オープン

(宝塚市 県営福井鉄筋住宅)

県内各所の仮設住宅から抽選によって移り住んだ人が多い災害公営住宅のため、入居者同士のなじみが薄いという特徴があった。そのせいか、校区のまちづくり協議会が町内の会館で食事会を開催しても、なかなか継続して参加する人が少ないという状況だった。

ならば、地域から災害公営住宅へ出向いて、そこの集会所で喫茶を開こうと地域住民が立ち上がった。民生児童委員が中心になってボランティアグループ「ぐるーぷなか」を結成し、2006年7月に「喫茶ほんわか」をオープン。月1回開催している。

2008年からは、食事会「1日ゆったりの会」を開始。食事会に参加できない人には、自宅へ食事を届け、その際に会話を楽しんだり、つながりが途絶えないような工夫をしている。集会所を利用し、災害公営住宅だけでなく地域全体を支援することが、成功の鍵となった。

事例3

災害公営住宅の自治会が「ふれあいいきいきサロン」開催

(宝塚市 市営安倉南住宅)

1997年の入居の年に、災害公営住宅内に自治会が発足した。市社協のサポートもあり、その2年後に自治会役員を中心に週1回の「ふれあいいきいきサロン」が始まった。周辺地域へもチラシを配付し、参加を呼びかけたことで、地域との交流が生まれた。ほかの災害公営住宅の自治会との交流や関係機関との情報交換会を開催するなどさまざまな活動に発展。今では市社協との協働で、週1回総合相談窓口を設けている。



事例4

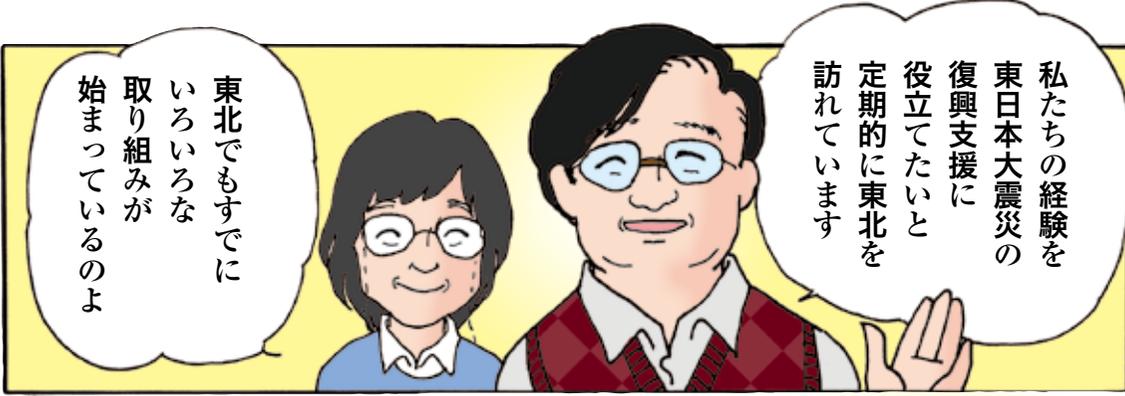
集会室を活かして周辺地域と交流

(姫路市 県営姫路勝原第2鉄筋団地)

この地域は、県営住宅周辺の分譲住宅群が一つの自治会だったため、自治会が災害公営住宅2棟(うち21戸がシルバーハウジング)の住民をみんなで受け入れようという意識があった。

災害公営住宅に配置されたLSAは、元からいる住民と新しい入居者のパイプ役を意識して動き、双方の交流を深めるために「ふれあい親睦会」も開催した。

また、災害公営住宅内の集会所は、自治会の会館として地域住民が気軽に立ち寄れる地域拠点となり、「あそこへいけば誰かとおしゃべりできる」と住民の出入りの絶えない、にぎやかな場所になった。



東北でもすでに
いろいろな
取り組みが
始まっているのよ

私たちの経験を
東日本震災の
復興支援に
役立てたいと
定期的に東北を
訪れています

福島民友 6月23日

災害公営住宅 進む自治会設立

県内35団地の8割

震災3年8カ月

心も温かお昼ご飯

自治会の活動が、被災者の生活を支えている。復興の第一歩として、自治会の設立が進んでいる。自治会では、お昼ご飯の提供や、生活相談など、被災者の生活を支えている。自治会の設立が進んでいる。自治会では、お昼ご飯の提供や、生活相談など、被災者の生活を支えている。

入居者の「顔合わせ」実施

石巻市 復興住宅コミュニティ対策

町内会との融和も支援

石巻市では、復興住宅の入居者が、町内会との融和を図るため、入居者の「顔合わせ」を実施している。町内会との融和も支援されている。

新たな絆 仙台育てよう

若林・荒井東

新たな絆を育むため、仙台育てようという活動が行われている。若林・荒井東地区では、新たな絆を育むため、仙台育てようという活動が行われている。

今秋にも入居開始

災害公営住宅

定員超なら抽選

絆維持へ「グループ」導入

今年秋にも入居開始となる災害公営住宅が、定員を超えれば抽選による入居となる。絆維持のために「グループ」を導入している。

来年度中3700戸

来年度中に3700戸の入居が予定されている。災害公営住宅の建設が進んでいる。

暮らしの復興 思いはせる

南三陸・町内初の災害公営住宅見学会

南三陸町内初の災害公営住宅見学会が開催された。暮らしの復興を思いはせる機会となった。

河北新報 9月29日

福島民報 6月11日

河北新報 7月13日

※新聞記事はすべて2014年



知らなかったわ

宝塚市で
20年経った今も
なお支援が
続いているなんて…

東北は20年
30年先の
コミュニティを
イメージしながら

みんな
考えないと
いけないのね

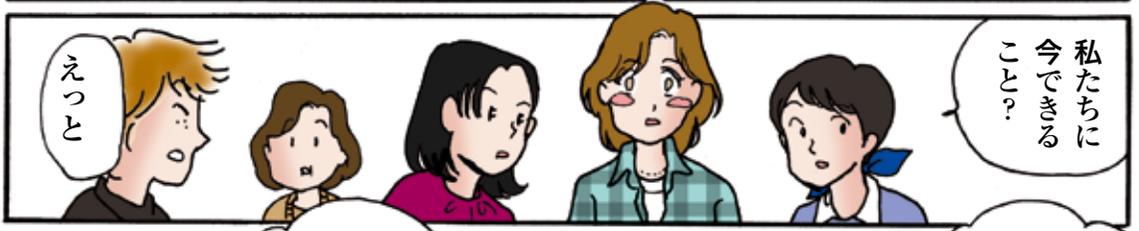
でも
私たちは
いったい
何をしたら
いいの？



どんな
ことなら
今、できそう
ですか？



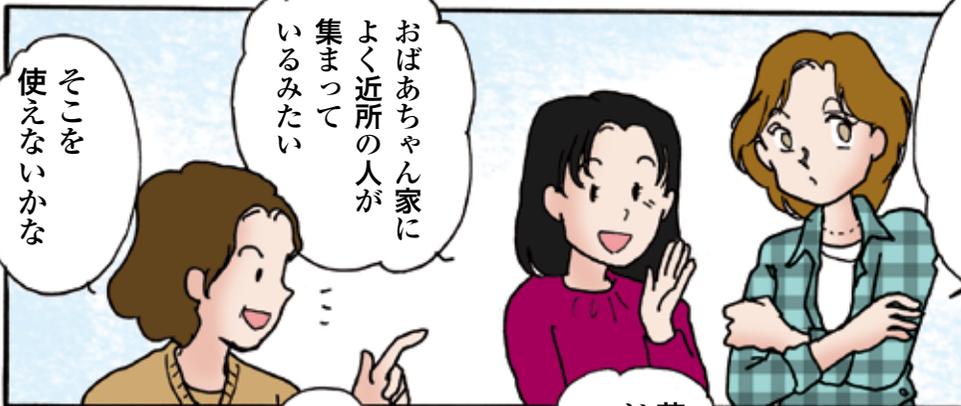
自分にできる
ことを
考えてみて
ください



私たちに
今できる
こと？

えっと

子育てグループにも
もっと
仲間がほしいわね



おばあちゃん家に
よく近所の人が
集まって
いるみたい

そこを
使えないかな



歓迎会も
やろう！



花の好きな人
がいたら
一緒に

花壇を
つくって
みたいな



始めるときに
たいせつなことは
災害公営住宅に
入居する人たちと
一緒に
すること
なんだ

それが
コミュニティ
づくり
なんだよ

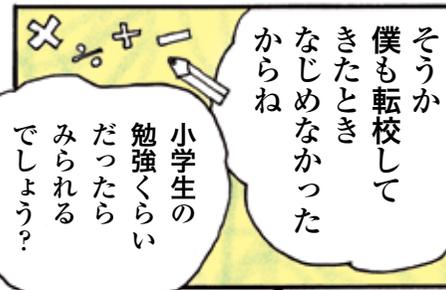


高校生の
僕に
できることも
あるだろうか？



同じ住民に
なるん
だものね

そうだね



小学生の
勉強くらい
だったら
みられる
でしょう？

そうか
僕も転校して
きたとき
なじめなかった
からね



子どもたちと
遊ぶ
ボランティアなら
できるん
じゃない？

よかったね



行政の
担当者に
聞いてみます

その周辺地域
全体で使える
ものですね

ここにいる
集会所を
災害公営住宅と



大学生の力も
借りて
子どもの
学習ボランティア
をやって
みようかな

入居から1か月

歓迎会と
記念植樹が
行われた



集会所



災害公営住宅の
集会室は

受け入れる
地域の人と
災害公営住宅に
引越してきた人の
つどい場となり

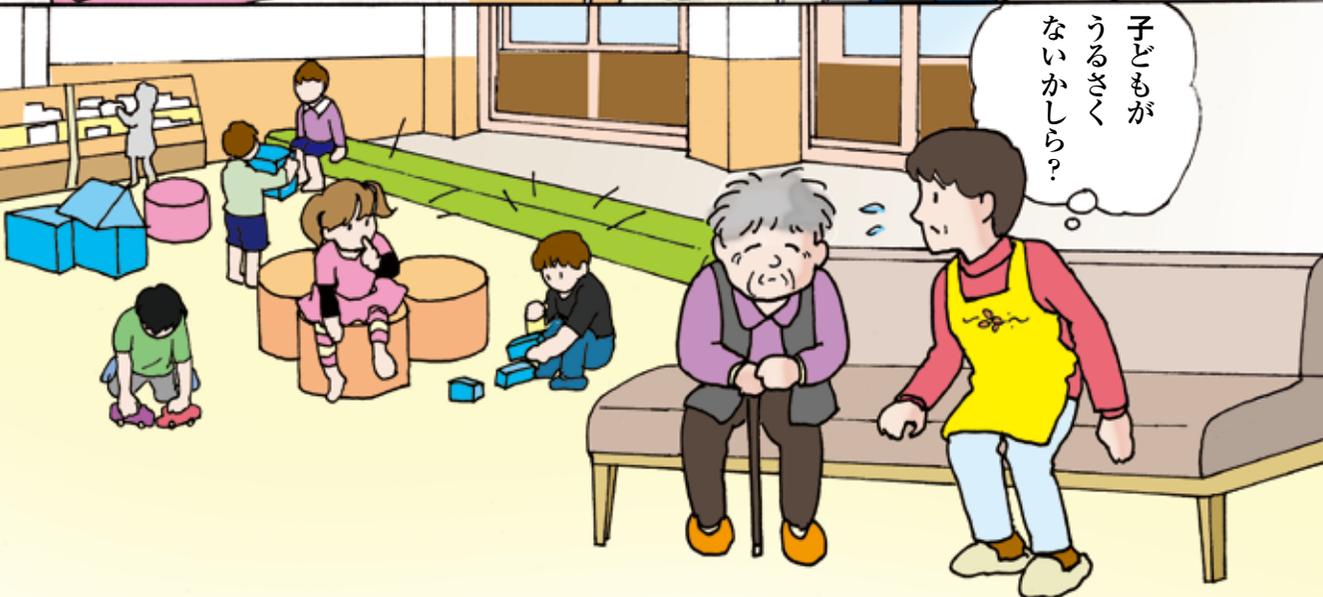
親子クッキング教室



さまざま
活動の拠点と
なった



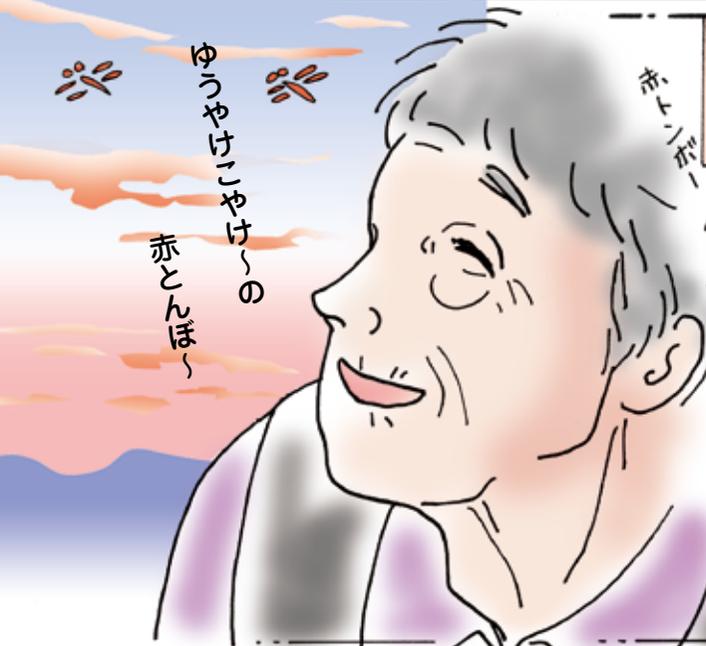
子どもが
うるさく
ないかしら？





おばあちゃん
あっちへ
行くのうか？

いいじゃんか
電車は
ぼんだー



ゆづやけゆづやけの
赤とんぼ



おばあちゃん？



わー
ホトトギス



うるさいと
思ってたけど

子どもが
いたほうが
刺激になって
いいの
かしら？



団地の外の
人だべ？



あんたら
どこの人？

3時から
集会所を
予約している
子育て
サークルです
2時半さ
まあだ
早いで
ねえの？

図書室



えっ…

ママ

あっちの
本のお部屋に
行こうよ

ミカ
なんで
そんなこと
知ってるの？

幼稚園の
お友だちが
ここにいるの

おもしろい
おもしろい
おもしろい

大人が
なじむのは
時間が
かかるのね—

子どもたちの
ほうが
もう仲よく
なっている

学習
ボランティアも
始まった

図書室



あれ お前
藤原だっけ

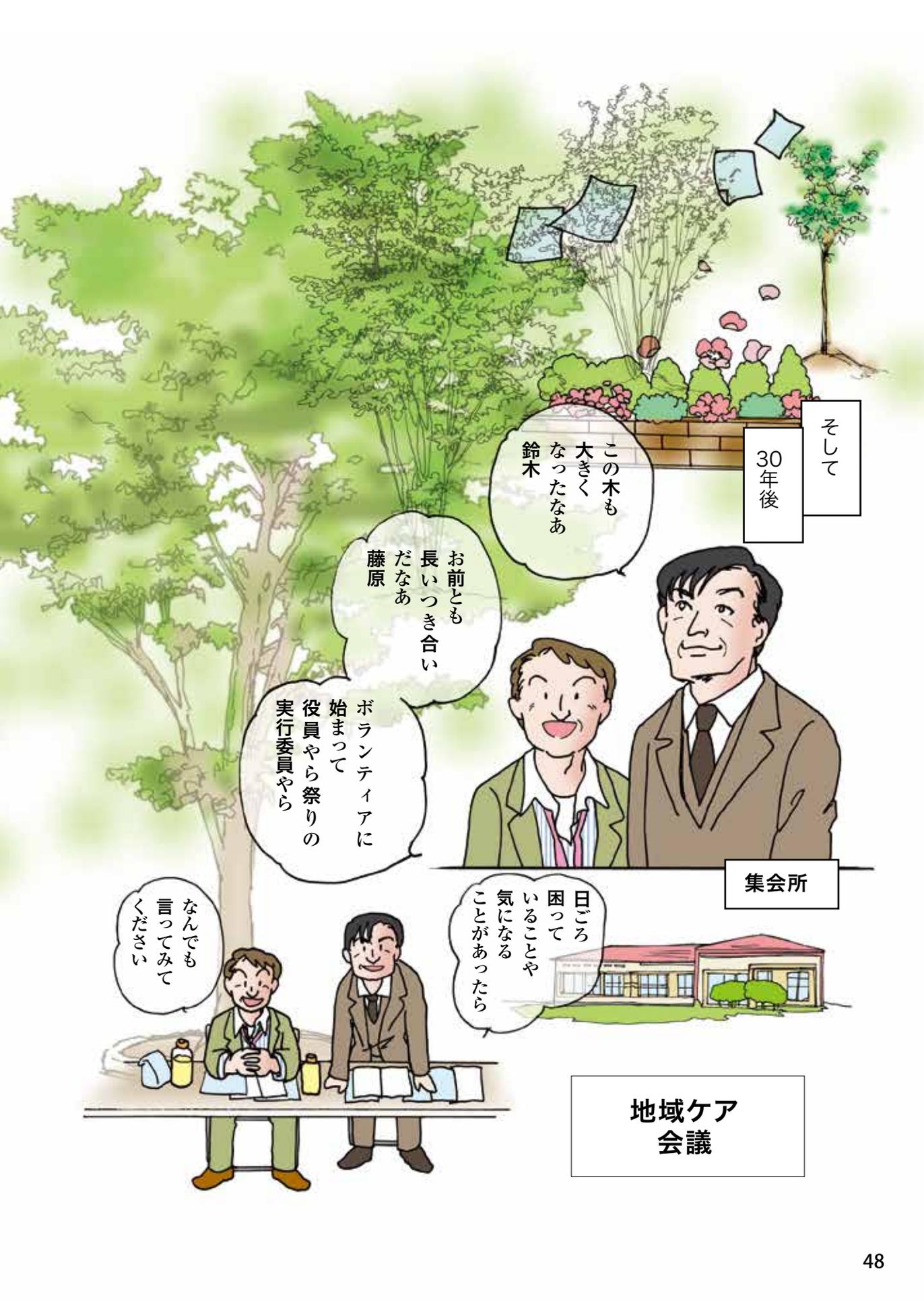
鈴木？
ここに住んでるの？

そだよ

学習ボランティア
だっけ

オレも
ひまっちゃ
ひまだからさ

仲間も
増えていきました



そして

30年後

この木も
大きく
なったなあ
鈴木

お前とも
長いつき合い
だなあ
藤原

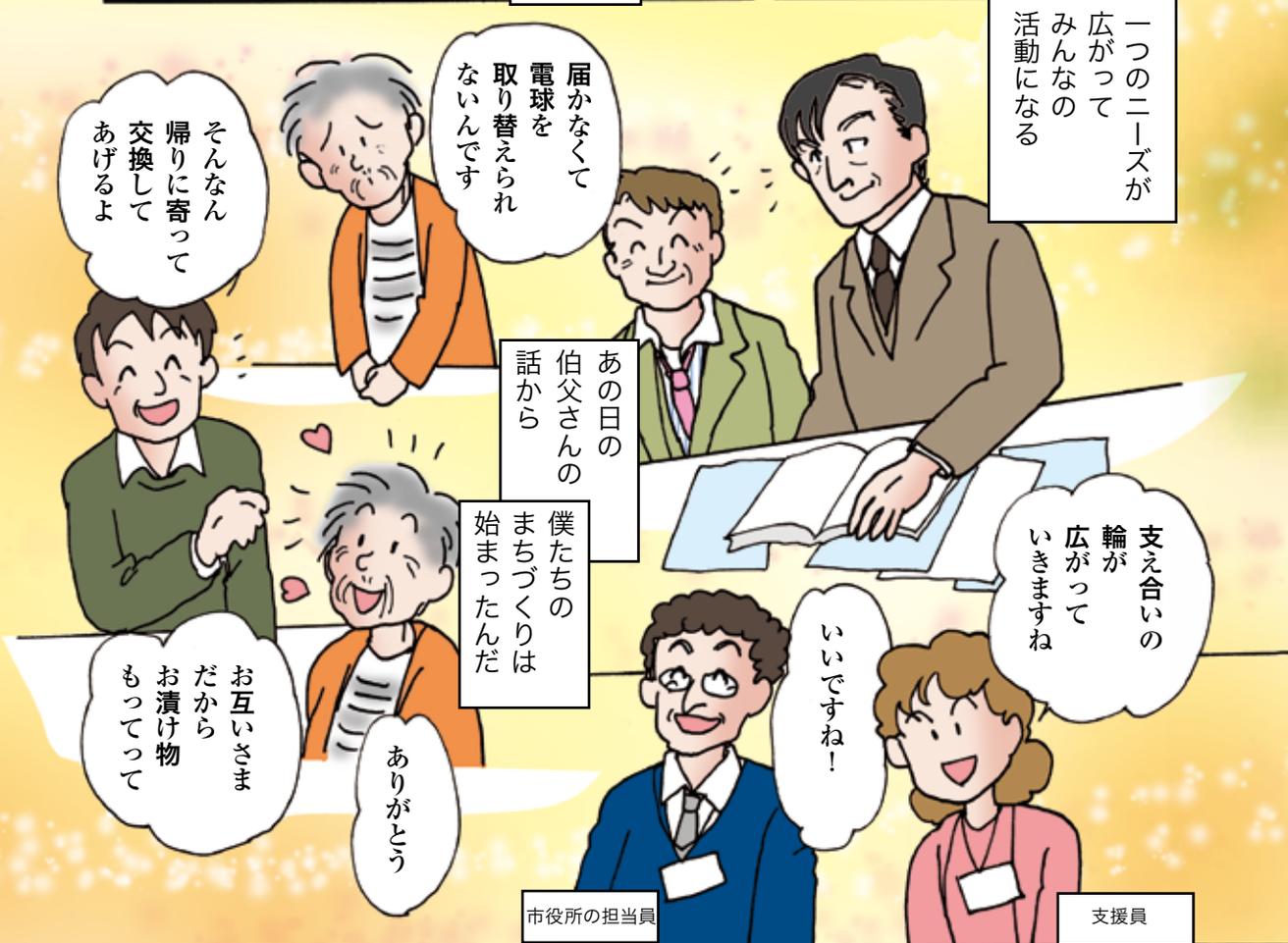
ボランティアに
始まって
役員やら祭りの
実行委員やら

集会所

日ごろ
困って
いることや
気になる
ことがあったら

なんでも
言ってみて
ください

地域ケア
会議



自分に
できることを
という

伯父さんの
言葉が
きっかけに
なって

地域の人と
災害公営
住宅の人が
一つになって

自分たちの
居場所を
つくったんだ

30年前に
みんなで
知恵を出して
考えた
さまざま活動が
養分となって
大地にしっかり
根を張ったんだよ

災害公営住宅が建つ 地域住民の視点

— 受け入れる際の留意点

●大坂 純

仙台白百合女子大学教授

被災者の立場を理解する

被災者は、新しい地域に慣れるまで相当の努力を必要とします。これは時間のことだけではありません。これまで慣れない地域での暮らしをしてきた被災者は、再び慣れない地域での生活を強いられます。もちろん、これまでの経験を活かして地域に溶け込むことのできる人もいますが、高齢化や障害や疾病の重度化、仮設住宅での生活疲れといった理由から地域に溶け込むことができない人が少なからず存在するということです。

このような人への働きかけのポイントは、あせらずに相手のペースに沿って始めるということです。時間をかけること、待つことを忘れないこと、相手を理解することを念頭におきましょう。

ともに地域をつくる姿勢

受け入れ地域の人たちはただ受け入れるのではなく、ともに

住みよい新しい地域をつくっていくという姿勢が求められます。そのためには、被災者であることを際立たせないおつきあい、違いを認め合い、折り合いをつけてゆく関係性をつくるのがたいせつです。

ももとの地域にある課題を共有する

被災者にとっては、新しい地域で日常生活を整える時期になります。また、受け入れる地域の人にとっては、新住民を迎えて新しい地域づくりをする時期です。地域の住民側は、環境の変化が起こるのではないかと心配する人や、自分たちの生活にも影響があるのではないかと考える人も少なくないでしょう。

特に、災害公営住宅が建つ地域では、入居者の高い高齢化比率の問題や地域での孤立などの問題が心配されます。しかし、このような問題は、災害公営住宅だけの問題なのでしょうか。決してそうではありません。受け入れる地域においても、高齢化や地域支え合いの希薄化などといった課題は、少なからず存在します。災害公営住宅が建つことによって新しい課題を抱えるのではない、という意識をもつことがたいせつです。迎えられる住民の皆さんは、地域にあるさまざまな課題を、新しく加わる住民の皆さんと共有し、ともに支え合うための仕組みをつくることをしっかりと意識しましょう。

そのために重要な視点を3つ上げます。

1 「理解し合い伝え合う」という視点

お互いを理解するには、時間が必要です。受け入れ地域の皆さんから、地域の文化や伝統などのよいところをたくさん伝えましょう。また、災害公営住宅に入居する人たちがどういった仕事や暮らしをしてきたのかといった、これまでの経験などをよく聞くという姿勢もたいせつです。

2 「将来を見据えた関係づくり」という視点

最初はぎくしゃくすることも少なからず起こります。住民一人ひとりが、その人らしく住み続けることができる地域づくりには、旧住民と新住民の隔たりは必要ありません。今だけを見るのではなく、遠い将来をも見据えた地域づくりをともにやっていくのだ、ということをしつかりと意識しましょう。

3 「認め合う関係づくり」という視点

第1の視点と第2の視点で関わる時、認め合う関係を意識することで、2つの視点による関わりがうまくいくことになります。災害公営住宅が、終の住み処となる人たちもいらつしやるでしょう。ともに新しい地域づくりをすることは、苗木を植えて育てていくようなものです。理解し合い、伝え合うという視点や、認め合う関係づくりが、成長に必要な水や肥料になります。そして、将来、住みやすい地域という大木に育を思い描いて活動を始めましょう。

●できるところからゆっくり始める

「新しい住民を受け入れてよかった」「新しい地域に移り住んでよかった」と思える地域。そして、「誰もが住みやすく、我慢できる」地域をつくることは、決して難しいことではありません。災害公営住宅ができると聞いて起こる不安を取り除くためには、阪神・淡路大震災の教訓と、災害公営住宅の内容を理解することが重要です。阪神・淡路大震災での経験を東日本大震災の復興に活かすことが東北の復興を早めることになります。

また、新しい地域づくりは日々の生活から始まります。普段何気なく暮らしている皆さんの地域にも、皆さんが築き上げてきた地域の文化や伝統があります。また、災害公営住宅の入居者の皆さんにも、それぞれの地域の文化と伝統を何気なく活かした生活がありました。ともに新しい地域を築くということは、地域に暮らす人々が日常生活を見つめ直す機会でもあります。日々の暮らしを基にした住民同士のおつき合いが、住みやすい地域をつくる大きな要素になります。認め合い、支え合う誰もが住みやすい地域づくりは、できるところからゆっくりと始めましょう。

「誰もが住みやすく、我慢できる地域」という青い鳥は、皆さんのすぐそばにあります。さあ、日々の暮らしから青い鳥を探す活動を始めましょう。

ここが私の生きる場所

画：スプラウトデザイン

今日も
山中村の
仮設住宅の
一日が始まります

あれ
よりこ
依子ちゃん
早いね

おはよう
ございます

今日うちが
ゴミ捨て場の
お当番
なんです

バイト
行く前に
やっとうとうと
思っ

No!

正広くん

オレ
手伝うよ

ダメダメ
お当番
なんだから

あんたら
支援員は
手を出さない
ことになって
るでしょ



私たちのふるさと
「山中村」は
3年前
大きな災害に
見舞われました

家々は倒れ
増水した
川に流され

山は崩れ
村へのただ一つの
ルートの国道は不通
ライフラインは寸断

「山中村」は
陸の孤島と化して
しまったのです



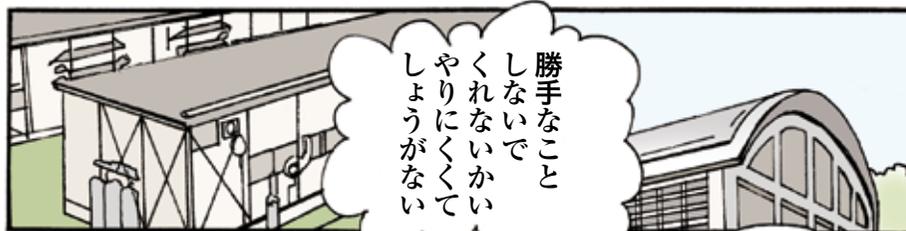
全村民が
自衛隊の
ヘリコプターに
よって
山を下りました



村全員で
避難しよう

このまま
ではダメだ

「山中村」村長
依子の祖父



勝手なこと
しないで
くれないかい
やりにくくて
しょうがない

2か月あまりの
避難生活ののち
集落ごとに
新しく建てられた
仮設住宅での
生活が
始まったのです



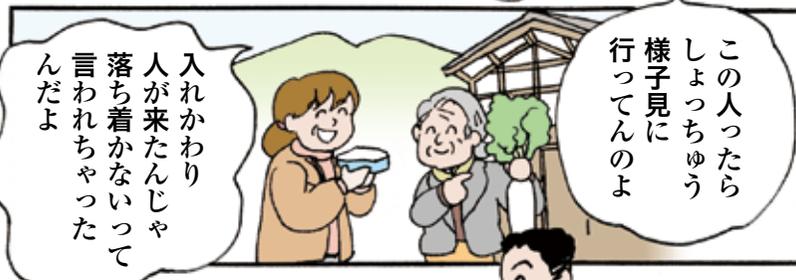
分家の
トシばあちゃん
ところには
村にいる時から
あたしが
行ってんのにさ

すみ子
おばちゃん
どうしたの？

依子ちゃん

ボランティアの
人の手配と
支援物資を
運んでくれたら
いいんよ

そう
言われても



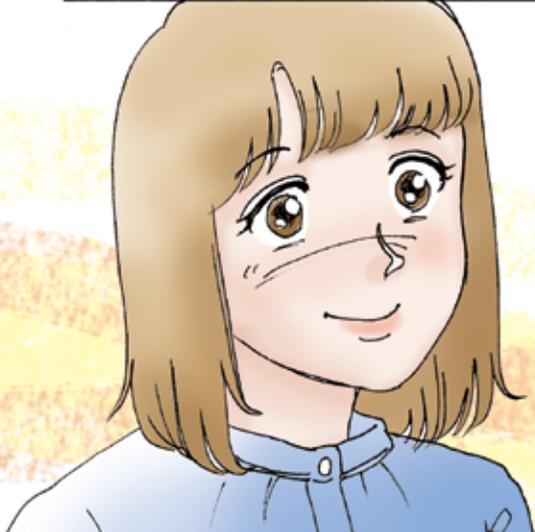
この人ったら
しょっちゅう
様子見に
行ってんのよ

入れかわり
人が来たんじゃ
落ち着かないって
言われちゃった
んだよ



あんたも
仕事だから
たいへんだと
思うけど

正広
依子の同級生
支援員



ここにはこの
ルールが
あるからね

正広くんは
村出身でしたが
小学生の時
ふもとの町に
引っ越し
ました

災害後の
サポートのために
支援員として
村に戻って来たのです

山中村のみんなは
山での暮らし
そのままに
生活していました

村長にも
手を出すなどは
言われて
るんだけど

村のコミュニティや
人間関係も
そのままに
仮設住宅で続いて
いたのです

支援員の仕事は
ゆるやかに
見守りを
するとともに

毎日
人の手配とか
ばかりだから
役に立ちた
かったんだよ

全国から寄せら
れる支援物資や
ボランティアの
手配に
追われていると
いうことでした

ただいま

お帰り

今日の
集会所の
寄り合い
どうだった？

見てみな
このあいだの
アンケートの
結果が出た

父

祖父

村長

依子の兄 しげはる 茂治

それは
村のみんなの
心の声でした

「帰りたい」の
合計が92%
だってさ

- ・できるだけ早く帰りたい
- ・公共設備が整わなくて不便でも帰りたい
- ・公共設備が整えば帰りたい



もうすぐ
村に帰れるんだね

うちは帰らない



よかったね!!

翔子ちゃん
避難指示が
解除になるん
だってね

山中村出身の
同級生 翔子
仮設住宅近くの
コンビニで
一緒にアルバイト中



建物の被害も
大きかったし

大阪に住んでる
伯父さんが
来ないかって
言ってるんだ

翔子ちゃん



ずっと村で
育って
来たのに?

山が好き
でしょ?
村が好き
でしょ?

あたしだって
村は好きだよ

でもしょうが
ないじゃない



村の人口は
減っていく
ばかりだし
働くところも
ないし

山中では
生活していけ
ないんだよ



山の暮らしには
課題がたくさん
あったのです

震災後3年
避難生活を送る
山中村の人口は震災前の
3分の1になっていました

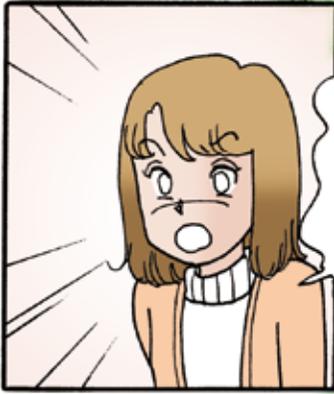


翔子ちゃん

震災前でも
村の高齢化率は
25%を超え

スーパーも
コンビニもない
山の中

うちは
山に
帰るんだよね



この仮設住宅は
平地だから
雪も少なく
雪下ろしも楽だね

病院に
行くのも
バスですぐ
歩いたって
行ける

スーパーも
近くて
買いものも
便利だわ

依子の兄 茂治
村役場職員



依子の父

依子の母

年寄りには
町の生活
のほうが
便利だろう？



なあに
言ってるんだ

何十年
山で
生きてきたと
思ってたんだ

依子の祖母

当たり前
だろう

町は便利だけど
やっぱり
山の村がいい

村に戻って
新しく
村の生活を
始めるんだ

帰ろう
山中村へ！

仮設住宅に避難
していた住民の
ほとんどは
村に帰ることを
選んだのでした

避難指示が解除され
村に帰る日が
やって来ました

私の家は
元の家があった
場所の近くに
再建しました



自主再建の困難な人や
希望する人には
災害公営住宅も
建てられました

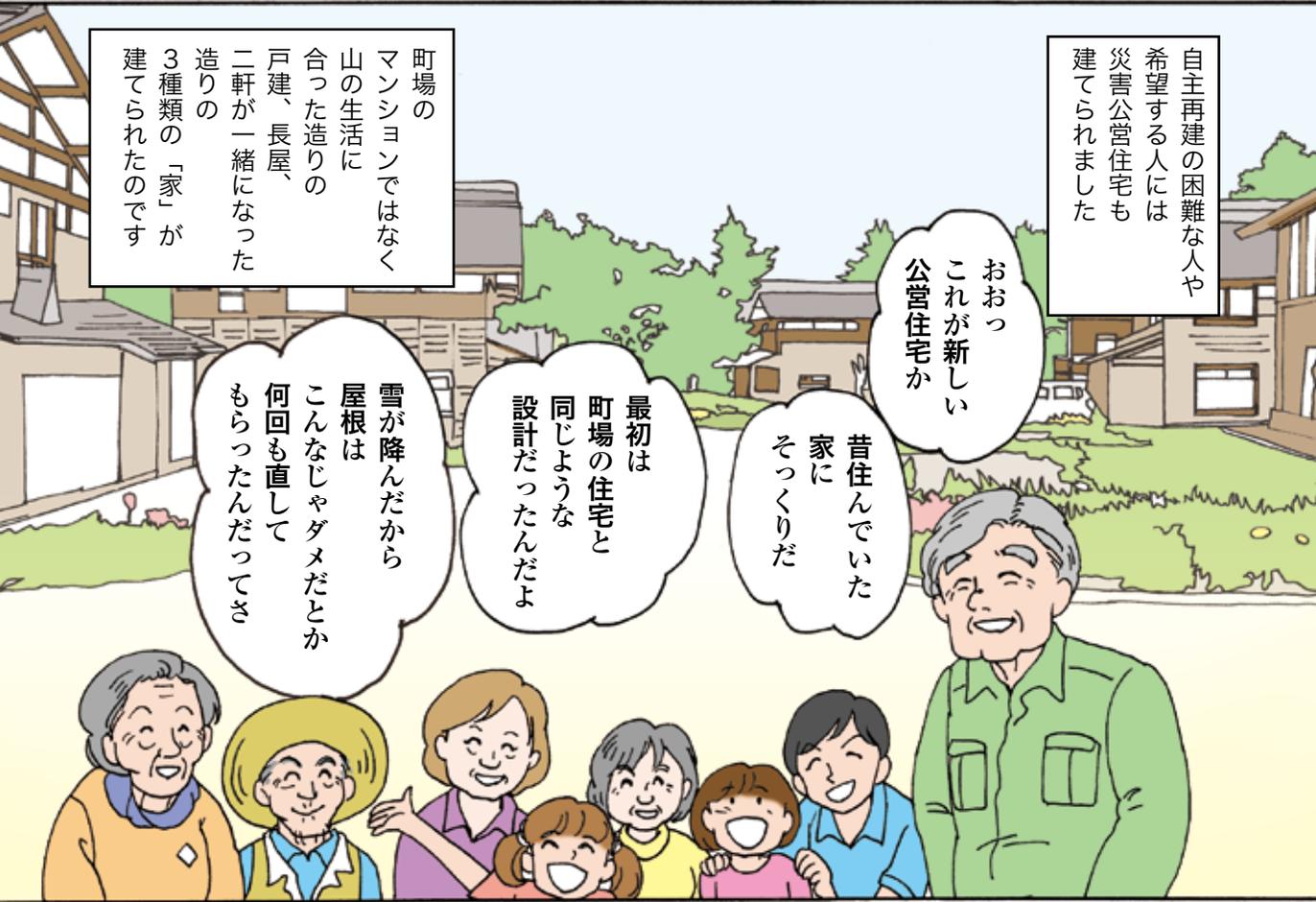
町場の
マンションではなく
山の生活に
合った造りの
戸建、長屋、
二軒が一緒になった
造りの
3種類の「家」が
建てられたのです

おおっ
これが新しい
公営住宅か

昔住んでいた
家に
そっくりだ

最初は
町場の住宅と
同じような
設計だったんだよ

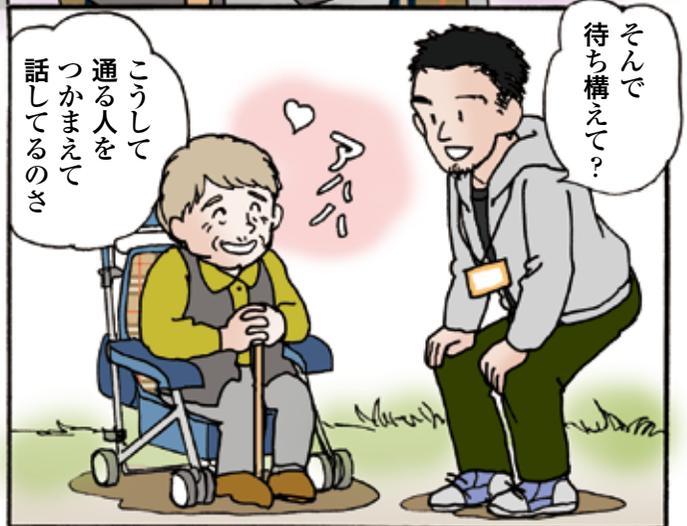
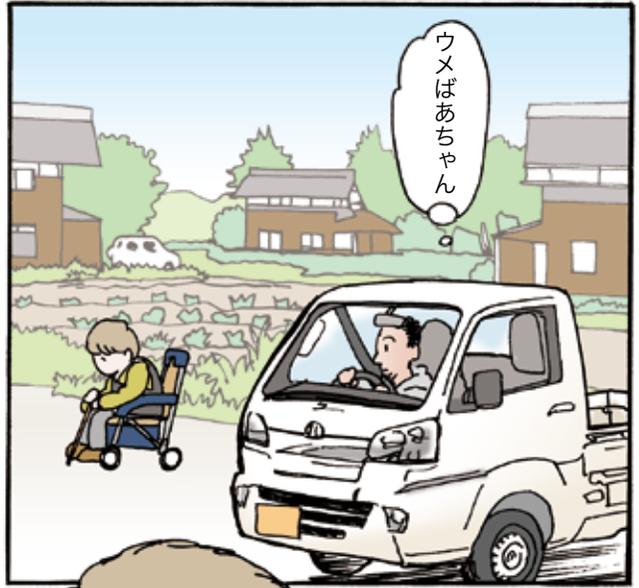
雪が降んだから
屋根は
こんなじゃダメだとか
何回も直して
もらったんだってさ



山中村の
災害公営住宅は
生活しやすい
ように



自分の畑に
通えるように
生活していた場所
もしくはその近辺に
建てられました







ふるさとへ
戻って
来ました
元の生活が
帰って来ました

でも
それだけじゃ
だめなん
じゃないの？

依子
まあ
聞けや



ここからは
山の棚田が
よく見えるな

じいちゃんの
そのまた
じいちゃんや
もつと昔から
受け継がれてきた
田んぼだ

機械が
入れねえから
何でもかんでも
手でやる
しかねえ



だからこそ
うまい米ができる

誇らしく
ないか？

おやじや
じいちゃんや
自治会や
支援員の正広や
村のみんな

一生懸命
山の生活を
これから
どうしていくか
みんな考えてる



これからの
山中村は
俺たち
村のみんな
作っていくんだ

あんちゃん…

震災から4年目
村の住民が帰還し
被災した地域に新たに
再生機構が設立され

支援員は
新たに
復興支援員として
村で働くことになりました

引き続き
お手伝いさせて
いただきます

世話になるのは
おめえのほうじゃ
ねえのか



村には
「住民会議」が
結成され

村の人たち
自治会
青年団
消防団をはじめ

社協や
大学や
いろんな団体を
巻き込んで

新しい村づくりの
ための
話し合いが
行われるように
なりました

まず
何が必要だと
思いますか？

村長 依子の祖父

震災で
路線バスが
なくなって
町の病院まで
行けなくなった

最近ではNPOで
コミュニティ
バスを
運行すると
いう例が
ありますね

支援員の
正広くん
それについて
調べてもらえ
ないかな？

はい





聞いてみたら 息子が建てた 今ふうの家には 茶飲み友だちを 呼べないんだと たいいてい 建て直した家は ローンの関係で みんな息子の名義 なんだわ

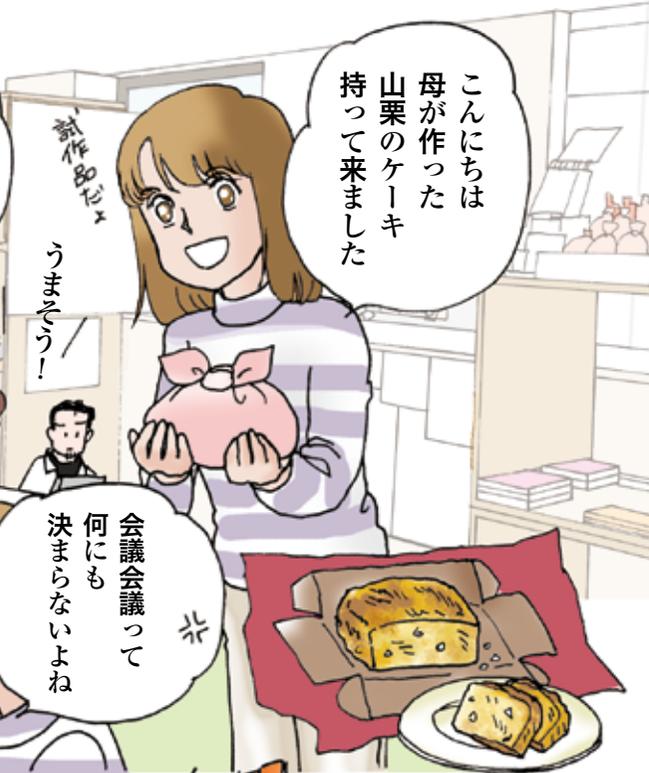
茶の間がない



家にも こもったら 健康上も よくない ですね

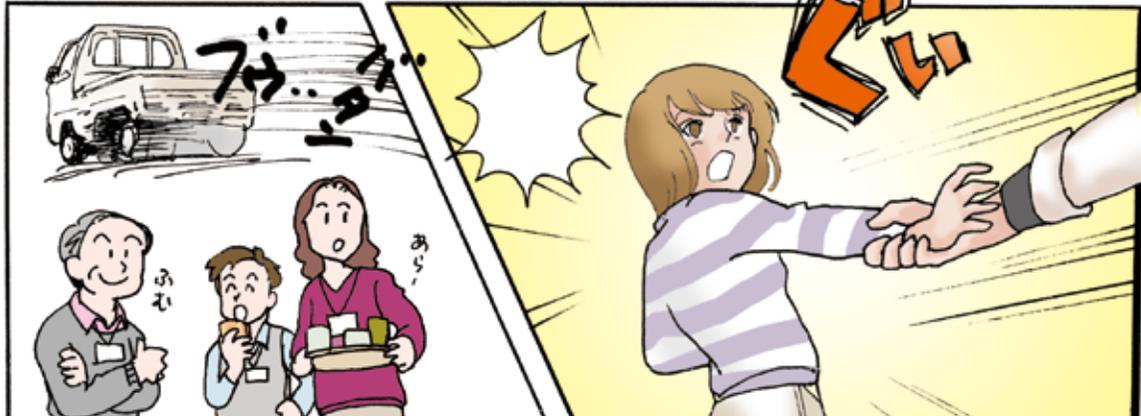


依ちゃんちの お母さんは 料理上手 だからねえ



試作おしゃべり うまそう!

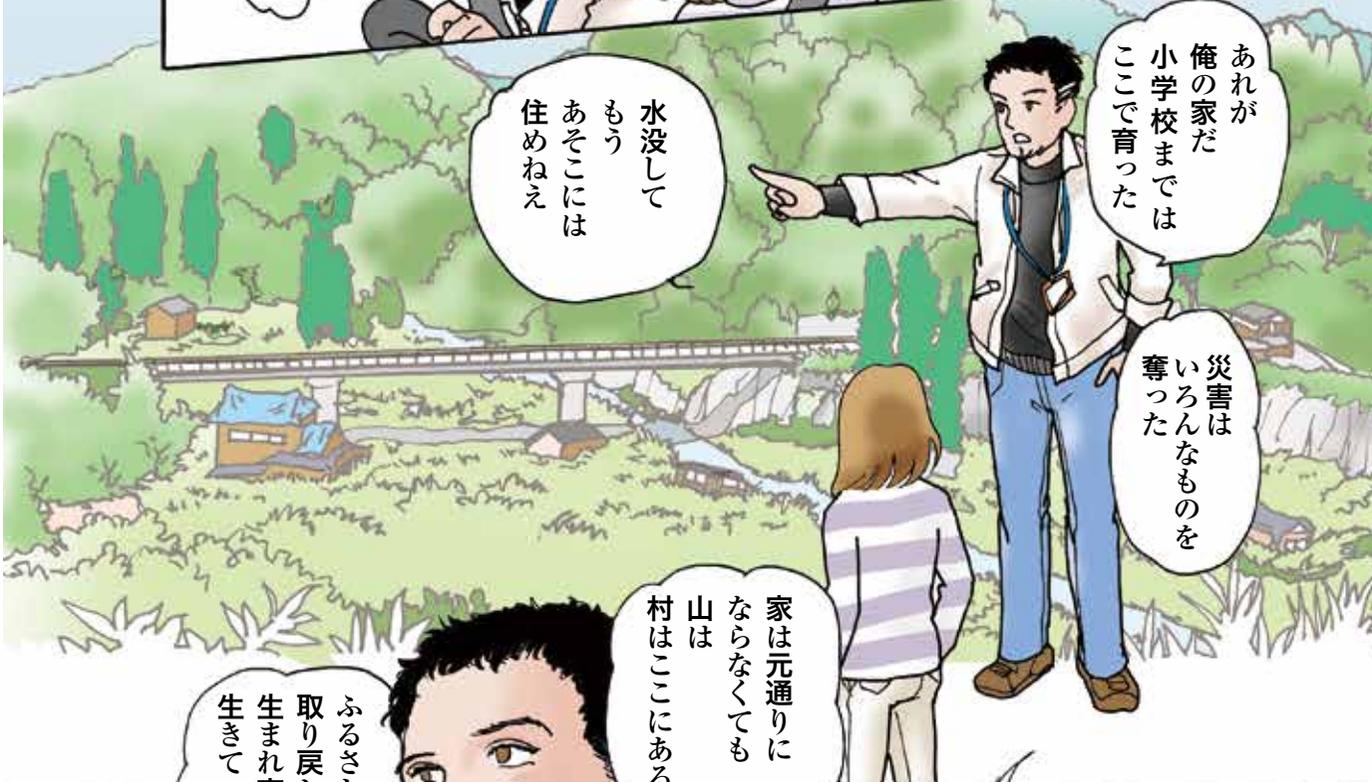
会議会議って 何にも 決まらないよね





だまってろ

どっへん
つれてくのよ



水没して
もう
あそこには
住めねえ

あれが
俺の家だ
小学校までは
ここで育った

災害は
いろんなものを
奪った

家は元通りに
ならなくても
山は
村はここにある

ふるさとを
取り戻したい
生まれ育った村で
生きていきたい
それを
忘れないために
ときどき
ここに來るんだ

なんとか
したい
気持ち
一緒だと思っ
ようよ？





この村には
なんにもない
なあと思つて

依子
なあに難しい
顔してんだ

なんにも
ないだつて？

村で生きてくために
必要なことつて
なんだろう？



この村には
山もある

立派な
棚田もある
畑もある



冬は雪で
たいへんだども
お互いに
手伝つて
雪下ろし
ができる

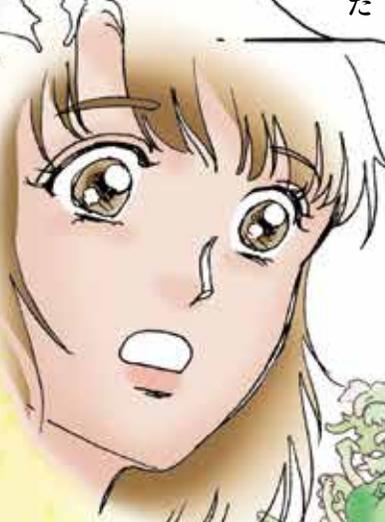
震災の時だつて
みんな
助け合つて
乗り切つてきた
じゃねえか



そうか！

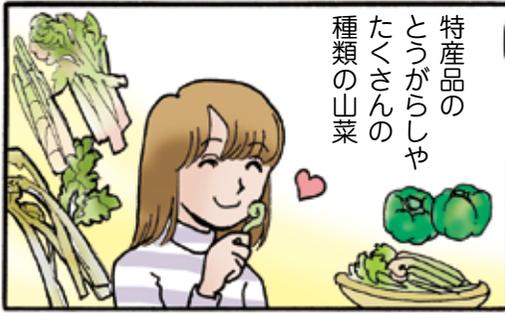
この村の
魅力！

あれがない
これがない
じゃなくて



こちらでしか
とれない
とうがらしや
そばだつて
うまいものもある
だろう？





特産品の
とうがらしや
たくさんの
種類の山菜



今日は
山菜の
天ぷらよ

そして
それは
たとえば



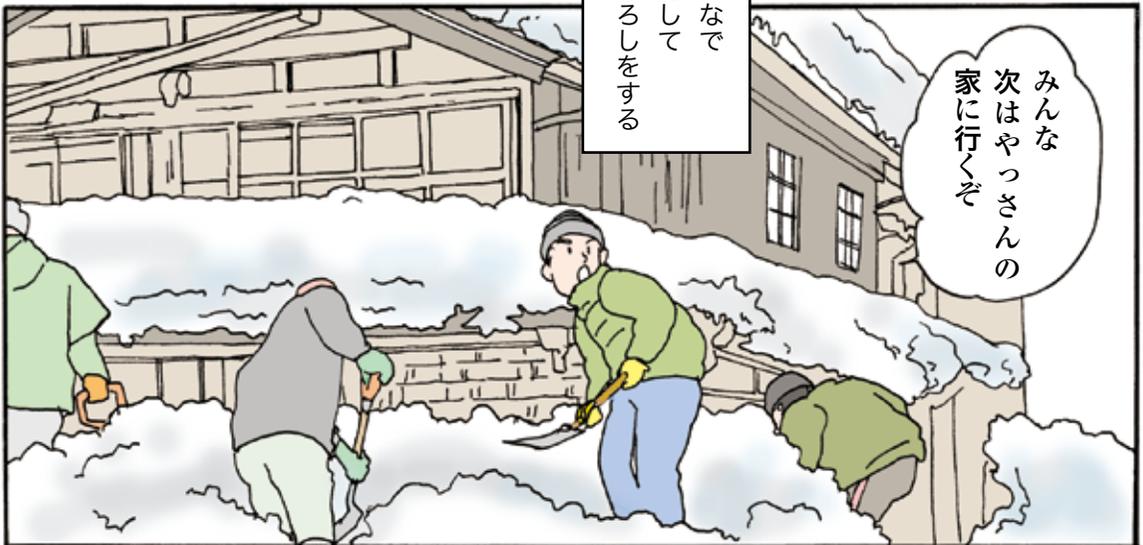
雪が
降れば



昨夜も
ずいぶん
降ったなあ

次は
やっさんの
とこだ

みんなで
協力して
雪下ろしをする



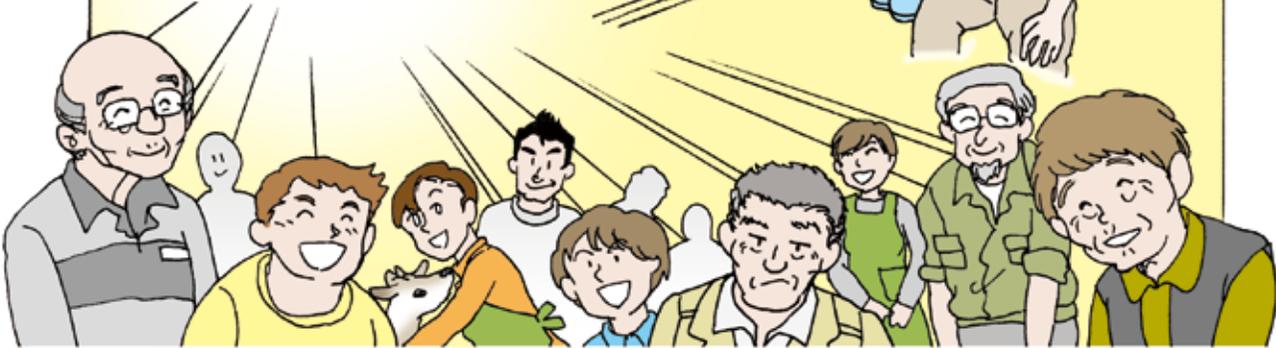
みんな
次はやっさんの
家に行くぞ

バスがなければ
車に乗り合って
協力する

子どもの
世話も
みんなでみる

鍵も
かけたことない
みんな
知り合いだから

豊かな自然
そして
村の人との
絆：
それこそが
宝なんだ



住民会議の
成果として
まず最初に

隣の市のバス会社に
業務を委託して
コミュニティバスの
運行が
スタートしました

ばあちゃん
これが回数券
これを
一枚ずつ
使うんだよ



震災で倒壊した
山の上の神社を
再建して
祭りを
再開させたい

おめー
簡単に言うけど
社とか鳥居とか
いくらかかると
思ってたんだ

村の顔役
やっさん

社は
あとでいいし
みこしも
大層なもの
は
いら
ない

手作り
で作った
って
いい
んだ

だ
ども
…
そ
う
簡
単
に
は

学
校
の
テ
ン
ト
張
っ
て
店
や
っ
た
ら
売
れ
る
か
ね
え
?

お
金
は
復
興
予
算
か
ら
回
せ
る
か
も
し
れ
な
い

村
の
み
ん
な
の
気
持
ち
を
合
わ
せ
る
に
は
シ
ン
ポ
ル
や
イ
ベ
ン
ト
も
必
要
だ

村
長
が
そ
う
言
う
ん
な
ら
…

そ
う
し
て
手
作
り
で
祭
り
が
復
活
し
ま
し
た

山
中
村
ま
つ
り

YAMA
NAKA

またある時は

野菜の
直売所を
やりたい

うちの
カミさんが
村に戻っても
ひきこもりに
なつて

人と話したり
外へ出ることの
きっかけに
なればと思うんだ

うちも
参加したい

4世帯で
スタートした
無人販売所は

うちも
野菜
作ってるし

農産物直売所

今日は
こんなに

毎朝それぞれで
収穫して
ラッピングし
持ち寄って陳列して
夕方売り上げを
集計する

こりゃあ
店番が
必要かも

こうした毎日が
自然と
仲間としての
関係が深まった
そんな中

私 店番
しましょうか？

人がいることで
客足も増え
また
話し相手もいる
ということだ

直売所は
お茶飲み場になつていった
のでした

野菜や特産品は
時には遠く
都会の物産展にも
出かけて行って
出店しました

そしてために
村のカレーと
唐辛子味噌を
商品化して
みたのです



駅の売店や
道の駅に
おいてもらえ
ないかねえ

村や県、
商工会に
ツナギを
つけて
もらえないか
聞いて
みますね

道の駅！
なんだか
話がでかく
なってきた
ねえ

高齢者の
お茶飲みや
子育てサークルの
活動の場として
地区の
集会所が開放され

おや今日は
川上の
ヨネさんの姿
が
みえないね



帰りに
ヨネさんちに
寄ってみるわ



そんなふう
に
同じ村の
仲間であること
で
絆が

風邪気味
でねえ



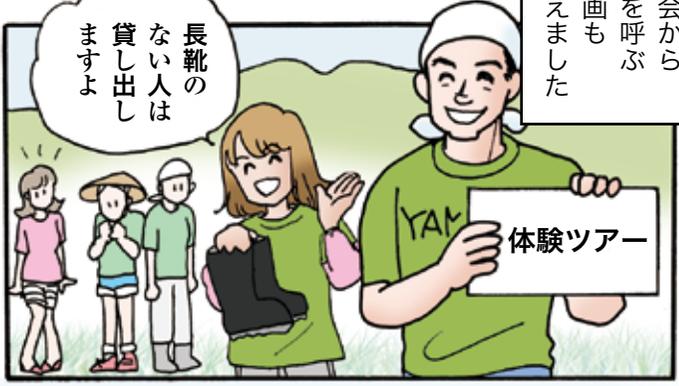
高齢者
見守りにも
つながって
いったのです

都会から
人を呼ぶ
企画も
考えました

長靴の
ない人は
貸し出し
ますよ

皆さんは
近隣の農家に
一週間滞在して
いただきます
民泊ですね

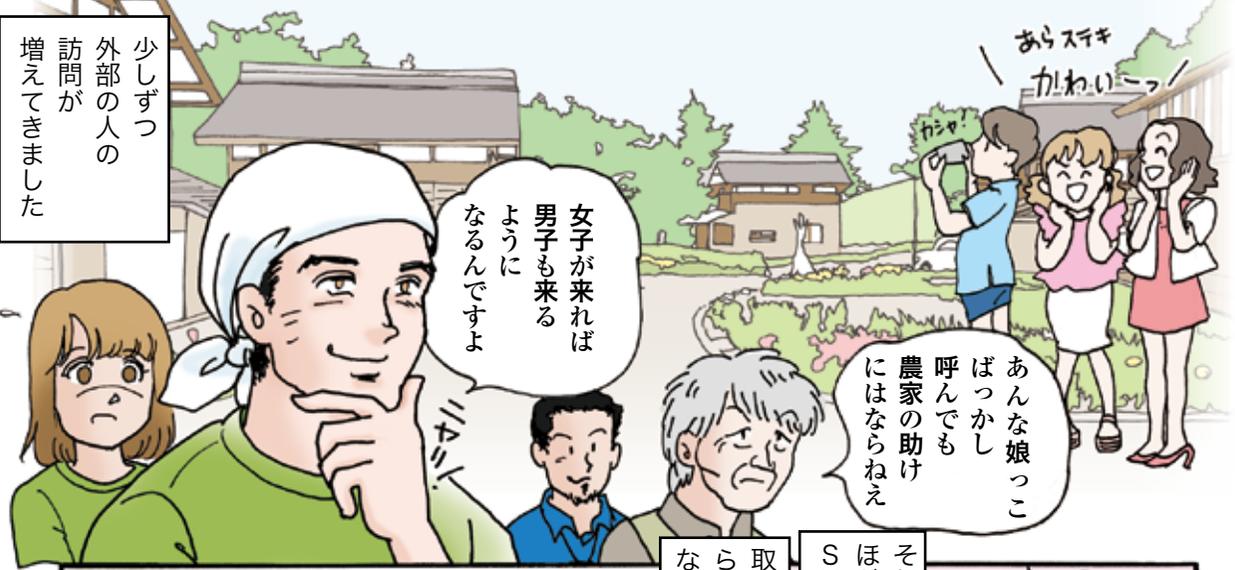
都会の若者に
農業体験を
してもらっ
てみます



少しずつ
外部の人の
訪問が
増えてきました

女子が来れば
男子も来る
ようになりますよ

あんな娘っこ
ばっかし
呼んでも
農家の助け
にはならねえ



取り上げ
られるよう
になり

それから
ほどなく
SNSに

田舎暮らしを
希望する
人のための
移住・定住
セミナーも
開かれるよう
になりました



村を離れていた
人も少しずつ
戻ってくる
ようになりました



住民会議



小遣い
稼いだな

へえ

直売所で
野菜を売って
得たお金で
ばあちゃんたちが
旅行に行った
そうですよ

直売所や
特産加工品も
それなりに
知られて
来たな

まだまだ
試行錯誤の
日々です



家に帰ってまで
会議の続き
やんなくても
いいのにな

おめーは
アイデア
ばっかしで

まだまだ
試行錯誤の
日々です

そうそう
依子
かあさん
店長に
なったのよ

あれも
きつと
楽しいのよ

少しずつ
確実に
村は変わって
きています

おばちゃんたちは
とうとう
定食屋を
オープンしました



いろんな
ことが
始まったね

災害があつて
たいへん
だったけど

ここから
棚田がよく
見えるから

依子
お前本当に
この場所が
好きだな

災害があつた
からじゃない

災害の前から
高齢化や
過疎の
問題はあつたんだ

村のみんなが
一緒になって
災害を乗り越え
村で生活するために
知恵を絞って
協力したから
いろんなことが
できるよになつたんだ



この村の再生のために
力になりたい

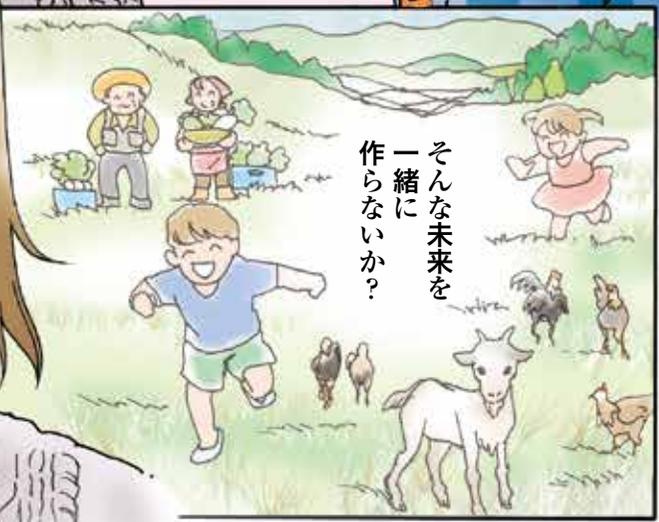
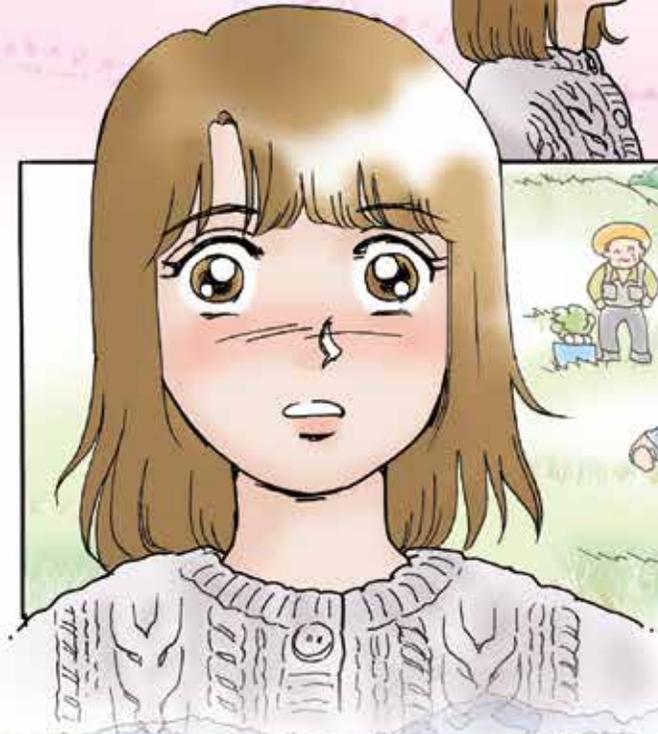
ずっと一緒に
手伝って
くれないか

想像してみろよ
たくさんの
子どもたちや
村の人が元気に
笑い合って
山で暮らす日々を

そんな未来を
一緒に
作らないか？

暮らしたら
いいと思わないか？

そんなふう
に
ずっと
このふるさとで



*このマンガ制作には、長岡市社会福祉協議会 本部事務局地域福祉課長の本間和也さん、並びに公益財団法人山の暮らし再生機構 長岡地域復興支援センター山古志サテライトの井上洋さんに、ご協力をいただきました。

災害公営住宅を含む

地域生活の再建

●大坂 純

仙台白百合女子大学教授

●「ありがとう」と言われる関係づくり

自力での自宅再建や、防災集団移転、災害公営住宅への転居がすすむと、被災した人たちは一般住民へと移行していきます。さまざまな体験をした人たちが、同じ地域で生活していくなかで、最初はごくしゃくすることも少なからず起こります。

これまでの避難所や仮設住宅での不慣れな環境では、我慢を強いられ、本音を話すことができない状況がありました。SOSを発することもできずに、周囲から孤立することもあったことでしょう。また、仮設住宅を退去したあとは、新たな生活に馴染むことに必死のあまり、それまで築いた人間関係が途切れていく恐れもあります。

気持ちを話せる人、一緒に笑える人がそばにいることで、社会的孤立は防ぐことができます。さらに、自分のできる範囲で、相手や地域に役立つことを実践しましょう。一方的に「ありがとう」と言うばかりではなく、相手からも「ありがとう」と言われる関係づくりを目指したいものです。小さなことでも人の役に立つ、地域の役に立つことが、生きがいづくりやコミュニティづくりにつながっていきます。

●地域を面でみる視点

震災という非日常から、平時に戻していくときには、住民一人

ひとりを点で見るとはならず、地域全体で面としてとらえていく視点がたいせつです。

中越地震が発災した旧山古志村では、仮設住宅時代の支援員を、帰郷したあとも復興支援員として継続雇用し、地域でのつながりづくりを担ってもらっています。

たとえば東北では、近所でのお茶のみが盛んだった二世帯同居の多い地域でも、震災後は家の名義が息子の代に変わり、高齢者は息子たちに遠慮をして他人を家のお茶のみに誘えなくなっています。自宅に引きこもって孤立することのないように、地域の実情に合わせて集会所でのお茶のみを提案するなど、支援員が住民と住民とをつなぐ役目を担うことが求められます。仮設住宅時代に培った力を、転居先でも支援員に引き続き発揮してもらうことは、被災地での貴重な人材の活用につながります。

●知恵や工夫を地域で共有する

地域の課題を見つけてこれからの地域のあり方を考えるとき、解決を図るのは住民自身です。住民会議などを活用して住民の力を引き出し、地域の連帯感を深めましょう。

特に支援にあたる人は、個人の困りごとに着目するあまり、それまで近所の人がしていたおかずの差し入れやゴミ出しの手伝いなどの好意を無視して個別に調理や掃除の生活支援を行い、住民のつながりを切ってしまうおそれがあります。一人では不便な生活も、近所や友だちのささやかな支えで、地域で豊かに暮らしていくことができます。

住民それぞれがもつ生活の知恵や工夫を地域で共有することが、住みやすい地域づくりへの第一歩です。

日本一のまちをつくらう

仮設住宅からの集団移転

画：スプラウトデザイン



突然の
大地震で
家や山が崩れ

体育館や
市民センターでの
避難生活が
始まった

仮設住宅での
生活がスタート
仮設校舎での
学校も再開した

おはよう

おはよう

遠くに避難した
家族もあり
クラスメイトは
随分
少なくなつた

なあヒロト
知ってる？

そうか…

トモちゃんも
出て行っちゃう
んだ

トモちゃん家
出ていくん
だって

その夜

カキカキ

カキカキ

滝沢さん？

ちよつといい？

地区会長

実は今度
集団移転に向けて
まちづくり
会議を
立ちあげる
ことになって

住んでいた
各地区から
代表を出す
ことになったんだ



それがなあ
阪神・淡路大震災のあと

役員になり手がなくて役員が高齢になって自治会が自然消滅してしまうこともあったらしい



皆さん
お疲れ様です

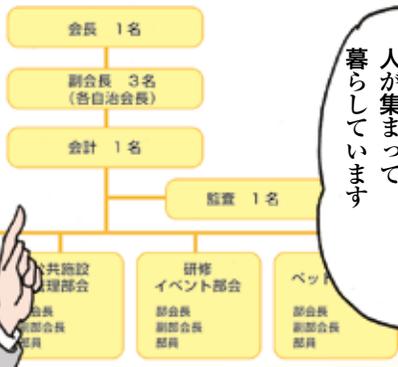
今日集まって
もらったのは

今後の集団移転後の
まちづくりについての
話し合いのためです

現在この仮設住宅には
10の地区から
人が集まって
暮らしています

仮設住宅自治会長

組織体制図



地区別に
若い世代を中心に
役員を選んで
もらいました

これからの
まちづくりの
要になって
もらえることも
考えて



このたびの
地震で
災害区域に
指定され

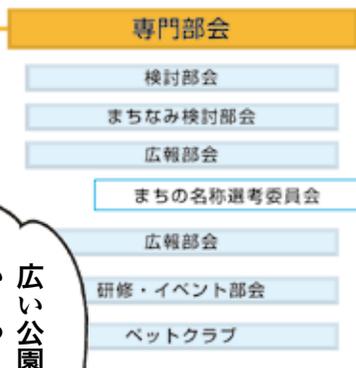
元の場所に
住めなくなった
人々が移転する

新しい候補地も
話し合いの結果
決まりました

地震で
亡くなった方も
帰って来られる
新しいふる里を
住んでよかったと
思えるまちを
みんなでもう一度
つくりましょう



まずは
まちづくり
協議会が設立
され

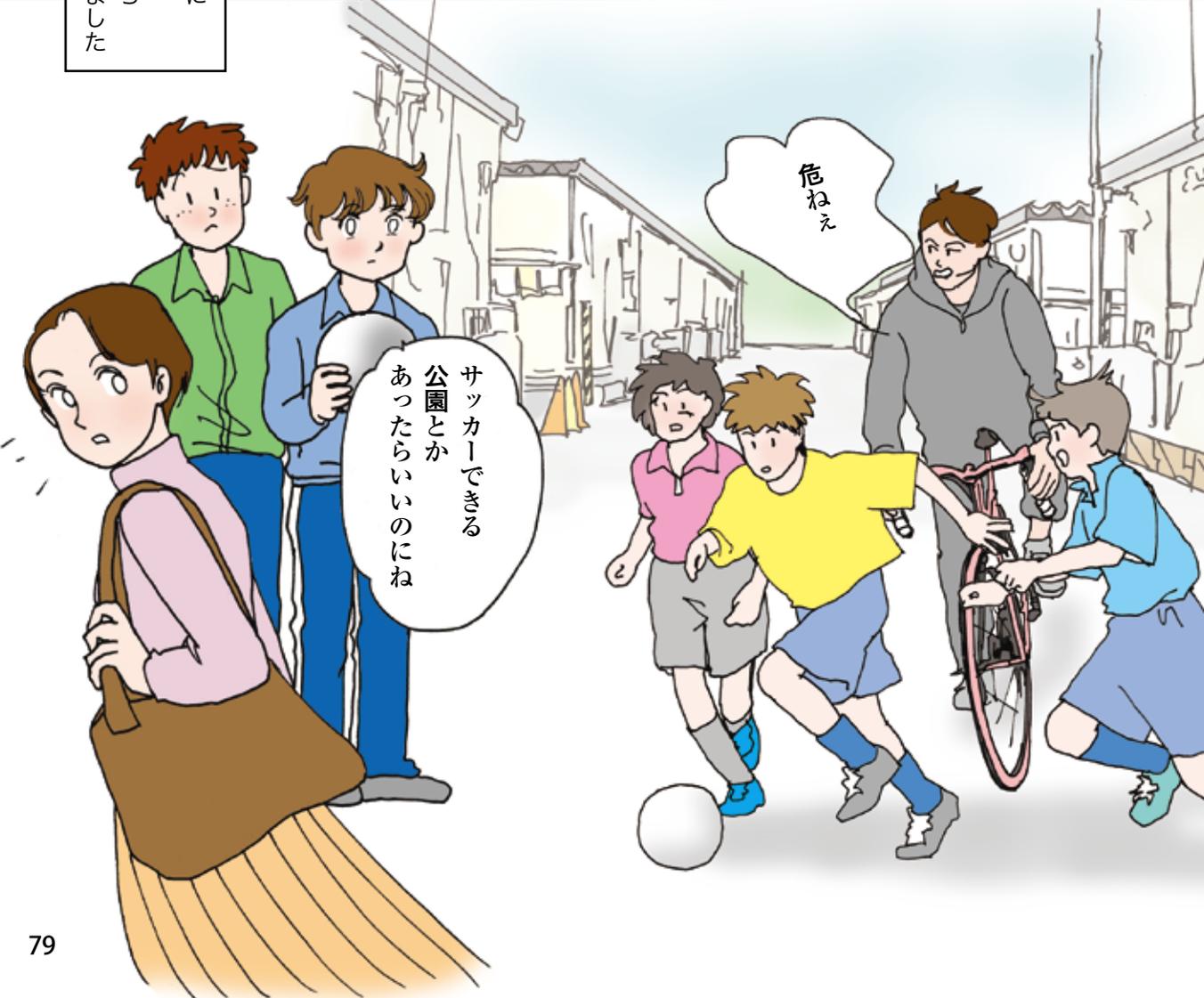


最初に
新しいまちに
何を望むかが
検討されました

広い公園が
いくつもある
子育て
しやすい
まちが
いいわ

各地区で
行われていた
祭りとかも
再開したいね

そんなふう
に月1回の
話し合いから
スタートしました



震災前の
地区の自治会が
中心になって
仮設住宅でも
自治会が
組織され
草刈りや
パトロールなどが
行われていた

なに言ってるの
子どもたちも
やってんの

大人が文句言う
わけいかなえな

あーしんど



ポランティア
グループの
呼びかけが
きっかけで
クリスマス
パーティーも
開催され



仮設住宅の
人々の間に
笑顔が
広がりました





おいしいね

うん

みすずちゃん



みすずちゃんのお母さんは夜お仕事に行っていて

エヘヘ

そんなに
おナカすいて
たの？

これ2つ
もらっても
いい？



今夜と
明日の朝
食べるの

お母さん
朝まで
帰って
来ないことも
あるからさ

そう…



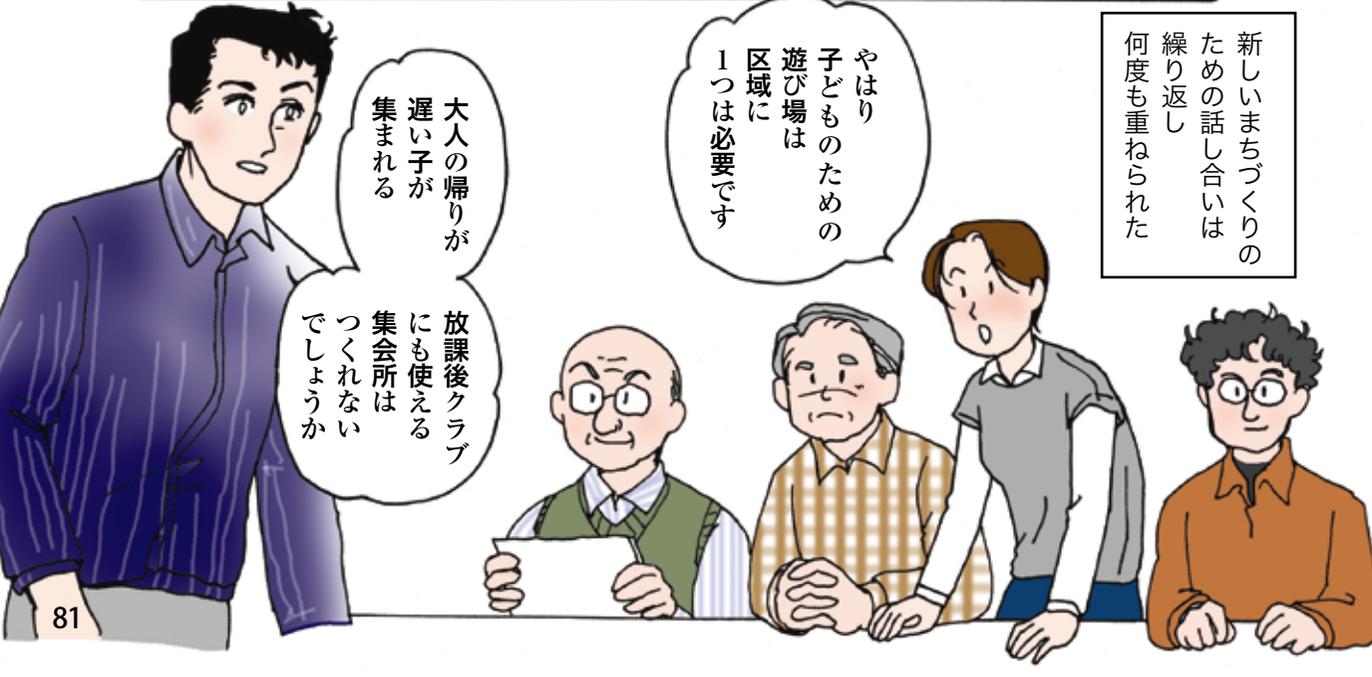
みすずちゃんは
地震で
お父さんを
亡くして
いるから
お母さんは
夜遅くまで
働いてるんだ

そうか

新しいまちづくりの
ための話し合いは
繰り返し
何度も重ねられた

やはり
子どものための
遊び場は
区域に
1つは必要です

大人の帰りが
遅い子が
集まれる
放課後クラブ
にも使える
集会所は
つくれない
でしょうか



高齢者や
障害のある方が
車イスで
利用できるよう

バリアフリーに
したいわね

広い和室も
ほしいわ

ヒロト！
今日の
話し合いでは

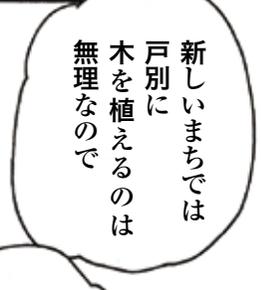
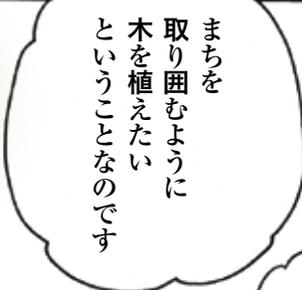
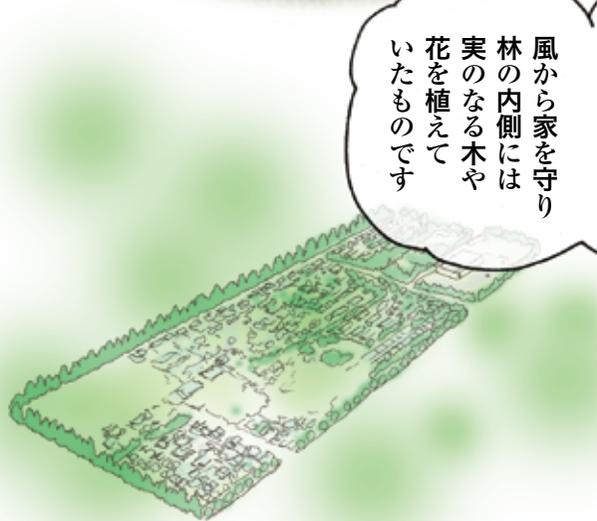
話し合いに
行政の人にも
来て
もらい
ましょう

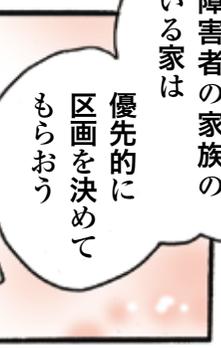
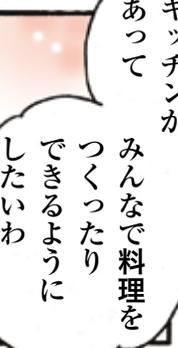
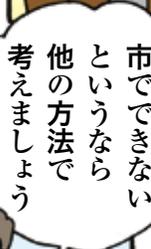
お父さん
放課後クラブ
について
発言したぞ

家族や
同じ地区の人が
近くに
住めるように
したいね

高齢者向けに
平屋建ても
必要だね

ハウスメーカーの
人を呼んで
こういう家が
ほしいっていう
説明会をしよう





町並やルールも決められました

引越したり転売してもルールが守られるように

新しいまちには
自主再建の家20棟と
マンションタイプの
災害公営住宅
100世帯が移り住む

20年先
30年先の
子どもたちに
誇れる
日本一のまちに
したいですね！

さて
新しい
地区の名称の
件だが

子どもたちにも
考えて
もらったら
どうでしょう

子どもたちの
未来のためなら

滝沢さん

子どもたちにも
その権利は
あるんじゃない
でしょうか

え？
ほくも
考えるの？

大人も
考えるよ

1人1票だ

住みやすいまちを
つくるため

「住みよさ
ランキング」で
人気の
ニュータウンを
視察したり
その市長を
招いて話を
聞いたりもしました

みんなが
希望した
まちの周囲の林も
みんなで植樹して
つくることができた

高齢者の活動や
子育て支援
放課後施設として
使える

集会所は
まちの3か所に
つくられ

そして、
3か所の公園は
イベント広場の
大きな公園
スポーツ公園
子どもの遊び場
として

多様な
ニーズに応える形で
つくられた



やがて
工事も進み
新しい建物も
次々に建っていった
仮設住宅からの
集団移転も
徐々に始まった



みすずちゃんも
引っ越しがあ

うちも
もうすぐだね



人が少なく
なったら

夏祭りは
どうなるん
だろう

草むしりや
パトロール

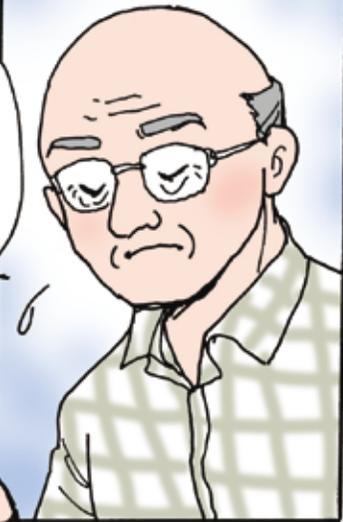


今まで
仮設住宅で
やっていた
イベントや



来春には
この仮設から
今の
自治会の役員は
ほとんど
いなくなる

それが問題なんだ



.....

高齢者は
見守りも
必要になる

仮設に残る
人たちは
自力での転居が
難しい人たちが
多くなる



仮設から
出て行っても

任期の
あるうちは
仮設の
自治会にも
協力して
参加すると
いうのは
どうだろう？

最後のひとりが
出ていくまで
自治会は残そう

そして
夏祭りや
草取りや
パトロールなどは
今までどおり
続けることに
なりました



新しいまちを
つくるために
みんな
とことん話し合い
集団移転を実現
したことで
多くのことを
学びました

まちづくりや
生活は
人まかせ
行政まかせ
ではなく



自分たちで
つくるもの
なんだなあ



もうすぐ
ここに
越してきて
初めての
夏祭りが始まる



*このマンガ制作にあたり、東松島市あおい地区
まちづくり整備協議会及び東松島市移転対策部
生活再建支援課並びに岩沼市玉浦西地区まちづ
くり住民協議会の皆さまにヒアリングのご協力
をいただきました。

仮設から本設へ 集団移転での新たなまちづくり

●大坂 純

仙台白百合女子大学教授

●集団移転地はニュータウン

多くの世帯が同時期に入居する集団移転は、まさにニュータウンです。新たなまちでのルールやつながりを、ゼロから育む必要があります。

東北の先進的な集団移転地では、避難所・仮設住宅期から住民リーダーたちが集団移転地の候補先を検討し、行政と協議しました。土地が決まったあとは、どんなまちにしたいのかを住民同士で協議する一方、移転希望者による交流会を開いて、転居前から顔を合わせて、風通しのよいまちづくりを目指した地域もあります。さらに、ハウスメーカーに声をかけて、各社がどんな家を建築できるのかを住民対象に発表する場を設けるなど、自主再建に向けたサポートを、住民自ら積極的に行ったところもありました。

●理想とする「まち」像を共有

集団移転地では、お互いの経験を持ち寄り、よいところを組み合わせて新たな文化を生み出していく努力が求められます。同じ

自治体出身者であっても、暮らした地区ごとにお祭りや冠婚葬祭などの伝統文化・地域性は異なります。公園や集会所の間取り、植樹などの街並み、自治会のあり方などを行政まかせにせず、住民同士で話し合い提案することで、みんなが理想とする「まち」像を理解し、共有することができます。その際、シニア世代の男性だけでなく、女性はもちろんのこと、学生や子育て世代なども参画しやすい場づくりを心がけましょう。多様な参画により多世代がつながり、自治活動の活性化とともに、新たなまちへの愛着が生まれることでしょう。

●住民主体で進めるまちづくり

集団移転において、主役はそこに住む住民です。自治体職員は地区担当制を敷いたり、住民がまちづくりを話し合う場に同席するなど、住民のニーズをしっかりと把握したうえで、「できること」「できないこと」「少し妥協すればできること」など知恵を相互に出し合って、納得しながら進めていくことがたいせつです。

また、集団移転や災害公営住宅への転居が進む一方で、生活再建の見込みが立たずに仮設住宅に残っている人たちの、自治やつながりの維持も求められます。人数が減って役員のなり手がなくなつたある仮設住宅では、そこを退去したあとも役員がそのまま仮設住宅の自治を手伝い、世帯の減つた仮設住宅でのコミュニティを守りました。

新たなまちでのコミュニティづくり、そして仮設住宅でのコミュニティの維持に同時進行で取り組む視点が求められます。



熊本県内15市町村で 「地域支え合いセンター」が 活動しています

被災市町村のうち15市町村^{*}では、熊本地震で被災した方々が、安心した日常生活を取り戻し、生活再建できるよう、見守りや健康・生活支援、地域交流の促進などの総合的な支援を行う「地域支え合いセンター」が活動しています（運営は各市町村社会福祉協議会が担います）。

センターでは、「生活支援相談員」等を配置して、仮設住宅やみなし仮設住宅、在宅等の被災者の方々を巡回訪問し、お困りごとや各種相談への対応、交流の場づくりのお手伝いを行っています。

※熊本市、宇土市、宇城市、阿蘇市、美里町、大津町、菊陽町、南阿蘇村、西原村、御船町、嘉島町、益城町、甲佐町、山都町、氷川町

「地域支え合いセンター」のイメージ

<目的> 被災者の安心した日常生活を支え、生活再建と自立を支援するため、見守り、生活支援、地域交流の促進、介護予防等の総合的な支援体制を構築する。

熊本県地域支え合いセンター支援事務所（運営：県社協）

運営支援

市町村地域支え合いセンター（運営：市町村社協）

生活支援相談員による被災者の見守り・巡回訪問などを通じて、各種専門機関等と連携して、生活再建と自立を総合的に支援する。

- ・総合相談受付
- ・アウトリーチによる課題発見、御用聞き
- ・見守り安否確認（福祉マップ作成等）
- ・コミュニティづくりのコーディネート
- ・健康づくり支援、健康相談対応
- ・いきいきサロン（地域の縁がわを含む）、各種サロン（子育て、健康づくり等）活動サポート 等

各種専門機関等

- ・復興リハビリテーションセンター（生活不活発病防止及び介護予防のための専門職派遣）
- ・こころのケアセンター（被災者の心のケアのための専門職派遣）
- ・地域包括支援センター
- ・民生委員児童委員
- ・社会福祉法人、NPO法人、ボランティア団体 等

連携・協力

総合的な支援

被災者

高齢者、障がい者、生活困窮者、子育て世帯等

応急仮設住宅

みなし仮設住宅

避難所

在宅

● 仮設住宅に「みんなの家」を設置 ●

熊本県では、応急仮設住宅で入居者の方々が少しでも安らぎ、お互いが暮らしやすい関係を築けるように、仮設住宅内に「みんなの家」という木造の集会施設を整備しています（2017年2月17日に、応急仮設住宅62団地に整備することとした84棟の「みんなの家」の整備がすべて完了）。

みんなの家は、集会などで使うだけでなく、日ごろから入居者の方々が気軽に集まって団らんを行っていただけるよう、土間や縁側が設けられています。「みんなの家」が十分に機能し、コミュニティづくりにつながるためにも、市町村が設置する地域支え合いセンターの働きに期待が寄せられています。



みんなの家(西原村小森第4仮設団地)

熊本県災害公営住宅等整備基本理念

2016年12月28日に「熊本県災害公営住宅等整備基本理念」及び「熊本県災害公営住宅等整備指針」が策定されました。（http://www.pref.kumamoto.jp/kiji_18076.html）
今後災害公営住宅等の整備が進められますが、その基本理念は以下のとおりです。

第1 災害公営住宅等（災害公営住宅、木造仮設住宅を活用した市町村単独住宅等をいう。以下同じ。）の整備は、復興計画等を策定し、住民の暮らしの再建等に主体的に取り組む市町村が行うものとする。

第2 市町村は、復興計画に基づき、被災者の意向を反映しながら、市街地や集落の再生など地域づくりに寄与する災害公営住宅等の整備を目指すものとする。

第3 県は、災害公営住宅等の整備が効果的にかつ、速やかに行われるよう、熊本県災害公営住宅等整備指針（以下「整備指針」という。）を策定するほか、整備事業の受託など、市町村への技術支援を行うものとする。

第4 整備指針は、本県が掲げる復旧復興の3原則に基づき、過去の震災での教訓や応急仮設住宅の経験等を活かし、次の3つの視点から定めるものとする。

● 「あんしん」のある住宅

日常生活の安全・安心だけでなく、災害時における日常生活の早期回復に配慮した住宅

● 「あたたかさ」のある住宅

住宅の木造、木質化を図り、ユニバーサルデザインに配慮した住宅

● 「ふれあい」のある住宅

多様な世帯の入居や交流に配慮し、居住者間や地域住民とのコミュニケーションを図りやすい住宅

ここまで
進んでいます！



熊本県

◎熊本県の応急仮設住宅の現状

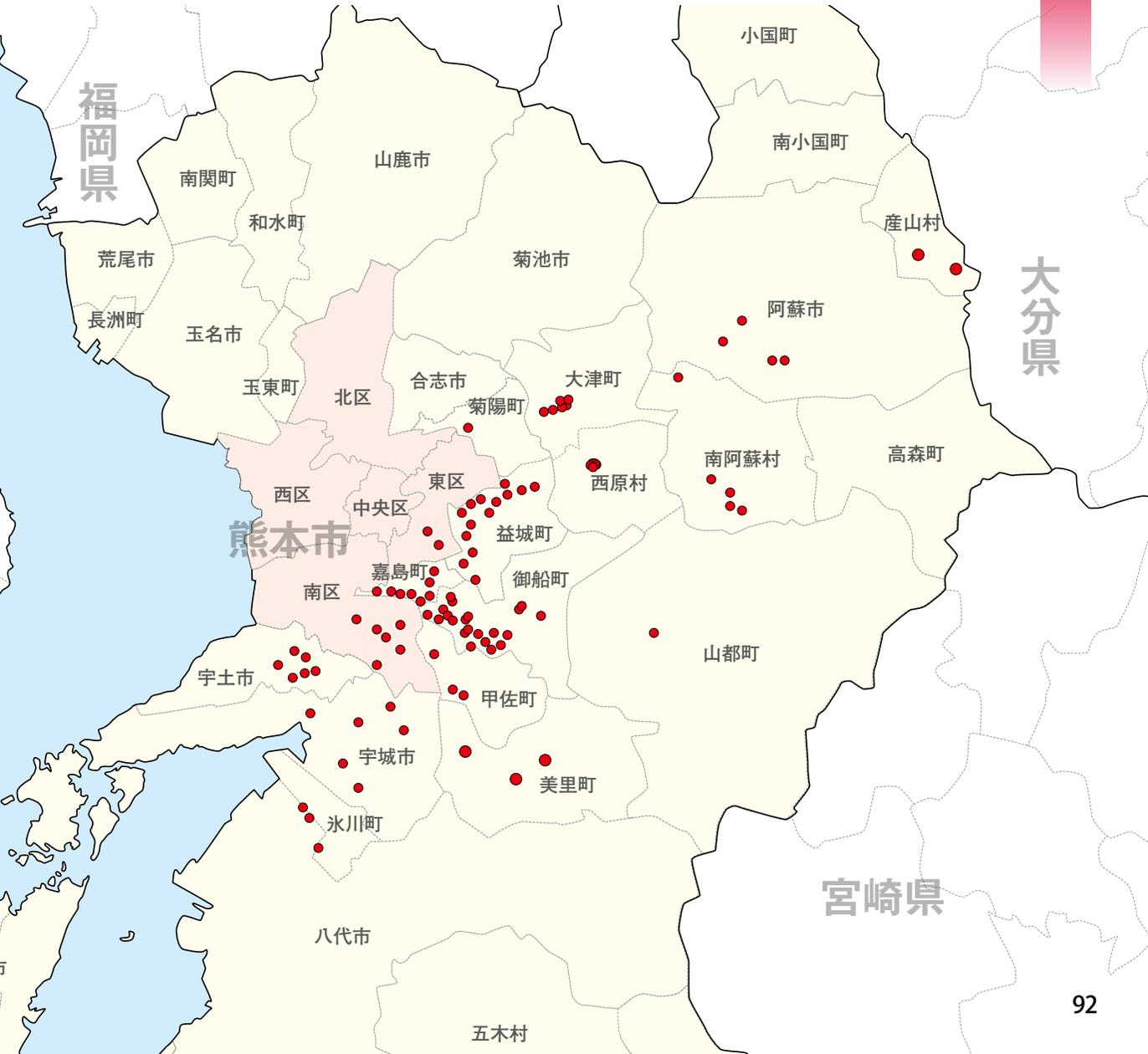
平成28年熊本地震により被災した方々のために、熊本県内の16市町村に応急仮設住宅が110団地・4303戸建設されました。

詳しくは熊本県のホームページをご覧ください。

http://www.pref.kumamoto.jp/kiji_15918.html

■応急仮設住宅一覧

市町村	整備戸数	市町村	整備戸数
熊本市	9団地 541戸	南阿蘇村	8団地 401戸
宇土市	6団地 143戸	西原村	5団地 312戸
宇城市	6団地 176戸	御船町	21団地 425戸
美里町	3団地 41戸	嘉島町	11団地 208戸
大津町	6団地 91戸	益城町	18団地 1,562戸
菊陽町	1団地 20戸	甲佐町	6団地 228戸
阿蘇市	4団地 101戸	山都町	1団地 6戸
産山村	2団地 9戸	氷川町	3団地 39戸





主役は私たち 避難所での コミュニティづくり

益城だいすきプロジェクト・きままに
(益城町)

熊本地震により、城町で最後に開設された避難所である益城中央小学校の体育館では、4か月にわたる共同生活のなかで、大家族のようなつながりが生まれました。さまざまな地域出身の被災者が集まったにもかかわらず、互いに声をかけ合って顔の見える関係を築き、行政やボランティアに頼らずに自分たちで避難所を自主運営したのです。

きっかけは、400人の被災者が雑魚寝をして足の踏み場もなかったフロアを、みんなで通路と寝る場所に区切り、余震が来た時に逃げられるように区画整理したことでした。その声かけをしたのが、地元で防災ボランティア団体を主宰し、避難していた吉村静代さん(66歳)です。

「ここを楽しい避難所にしたくて。上げ膳据え膳に慣れてしまったら、自立は困難。みんなでやれば自然と仲よくなれるから」と考えたのです。フロアの整理後は、出かける際には布団を畳んで周囲を掃除するようにと声をかけ、炊き出しや掃除を率先して行いました。1か月後、自治体から避難所に派遣された職員がトイレ掃除をしていることを吉村さんがみんなに話すと、自然とほかの被災者も協力してトイレ掃除を担うようになり、外出時には全員が「行ってきます」「ただいま」「お帰りなさい」とあいさつをする中に、館内の一角には、いすを並べた喫茶コーナーや子どもが遊べるスペースを設けて、一緒にお茶や食事をとりながら、互いの悲しみや苦しみを打ち明けるなかで、少しずつみんなが元気になっていきました。

2か月後には自治体職員が全員引き揚げ、完全な自主運営になりました。役割分担を一切行わず、「できる人が、できることをする」ことを貫いた結果、揉めごともなかったといいます。全員による除草作業を2回、体育館の大掃除を2回行い、避難所閉所時の片づけには避難所を退所した人も駆けつけて全員で行うなど、強い絆が培われました。

吉村さんたちはこの活動を「益城だいすきプロジェクト・きままに」と名づけ、仮設住宅に移った今も、避難所での絆と経験をもとに、新たなコミュニティづくりの核になろうと活動しています。

(小野寺知子)



支え合い活動2

談話室から 広がる多世代交流

平原仮設住宅（熊本市南区とみあい富合町）



右から、平江祥子さんと村上和彦さん

熊本県熊本市南区にある平原地区には、27戸の応急仮設住宅が建ち、2016年9月に自治会が発足しました。自治会長を務めるのは、平江義廣さん（66歳）・祥子さん（64歳）夫妻。熊本地震以前は町内会活動に積極的に取り組んできたわけではなく、役員経験はなかったといいますが、仮設団地内にある談話室によく顔を出して、ほかの入居者と交流を図っています。

談話室は、昼間は高齢者がお茶飲みなどをする居場所、夕方は放課後等児童クラブのように学校から帰った小学生たちが過ごす場所になっています。談話室によく来る者同士として、平江さんは子どもたちと親しくなり、子ども同士が遊んだりしている近くで面倒をみたりします。

家を空けて外出する親が、「子どもをお願いね」と平江さんにひと声かけて様子を気にかけてもらったり、子どもたちが平江さんの自宅に上がって、いっしょに遊んで過ごしたり、一緒に食事をしたりすることもあります。平江さんにとって、仮設住宅団地内でふれあう子どもたちは、自身の孫と同じようです。

子どもたちの談話室の利用方法や、子ども同士のケンカや関係性などを気にかけていた大人たちも少なくありませんでしたが、平江さんと熊本市地域支え合いセンターの生活支援相談員の村上和彦さんの働きかけもあり、子どもたちも落ち着いて談話室を利用するようになりました。

平江さんは、仮設住宅での生活について「孫ができたみたいで楽しい」と話します。

仮設住宅からの転出に向けて準備を進めながら、自分がいなくても仮設住宅がまともっていくように、集団生活の土台をつくり、前に出すぎずに引き継げるようにしたいと考えています。

（清野哲史）





東日本大震災・被災者支援のための
サポーターワークブック
【初任者演習テキスト】第2版

編 者：東北関東大震災・共同支援ネット
ワーク 被災者支援ワーク
ブック編集委員会（編集委員長：
藤井博志・神戸学院大学教授）
本体価格：2,000円＋税



東日本大震災・被災者支援のための
サポーターワークブック読本

編 者：藤井博志、荻田藍子
企 画：東北関東大震災・共同支援ネット
ワーク 被災者支援ワーク
ブック編集委員会
本体価格：2,800円＋税



東日本大震災・被災者支援のための
サポーターワークブック
【災害公営住宅等への転居期編】

編 者：東北関東大震災・共同支援ネット
ワーク 被災者支援ワーク
ブック編集委員会
本体価格：1,600円＋税



地域でともに暮らすための
支援合い活動・サービスのすすめ
— 支援合い活動や生きがい仕事、生活支援サー
ビス事業の立ち上げ支援講座テキスト —

編 者：高橋誠一、大坂純、
志水田鶴子



東日本大震災
地域生活支援
「困った」ときのQ&A

監 修：大坂純



集合住宅団地における「つどい場」と
災害公営住宅におけるつながりづくり
豊かに広がる12の実践

監 修：児玉善郎



被災地発！
多様なサロン・
つどい場の可能性

監 修：藤井博志



東日本大震災・
被災者の暮らしを豊かにする
「月刊地域支援合い情報」

編 集：東北関東大震災・共同支援
ネットワーク 地域支え合
い情報編集委員会
本体価格：286円＋税



被災者の暮らしを豊かにするための
「月刊くまもと
地域支援合い情報」

編集・発行：熊本地震・共同支援ネット
ワーク



生活支援
コーディネーター
養成テキスト

監 修：吉田昌司
編 者：高橋誠一、大坂純、志水田
鶴子 藤井博志、平野隆之
本体価格：2,400円＋税



改正介護保険における
「新しい地域支援事業」の
生活支援コーディネーター
と協議体

監 修：吉田昌司
編 者：高橋誠一、大坂純、志水田鶴子
本体価格：600円＋税



教材アニメーション 「未来の暮らし 創るのはわたしたち」 の使い方



佐藤寿一
宝塚市社会福祉協議会
常務理事兼事務局長／兵庫県

阪神・淡路大震災の経験を活かして

少子高齢化の日本において、阪神・淡路大震災時の災害公営住宅の高齢化率の高さは特殊な状況ではなく、今後どの地域でも抱える課題です。しかし、阪神の災害公営住宅の場合は見守りや生活支援を行う支援者が配置され、住民が支援者との1対1の支援に頼りすぎ、横のつながりをつくることなく支え合う力を失ったという反省があります。

入居者が新しい生活に落ち着き、地域になじむためには、部屋から出て地域の人と交流する機会を増やすことがたいせつですし、受け入れる周辺地域にとっては地域全体で「お互いを気にかける関係づくり」を心がけ、まちづくりにつながる機会になればと思います。そのために支援者には、災害公営住宅だけを切り取って支援するのではなく、周辺地域も一体的に支援する視点が求められます。

第1幕

「勇気ある決断」



山川仮設住宅にひとりで暮らす、元漁師の太郎さん。災害公営住宅への転居を勧められますが、新しい環境に不安を感じ、決心がつきません。

しかし、仮設住宅はいずれ取り壊しになります。引越す人が増えて、徐々に空きが目立つようになった仮設住宅をみて、ついに転居を決心します。

 **ここまで見た感想を自由に話し合きましょう。**

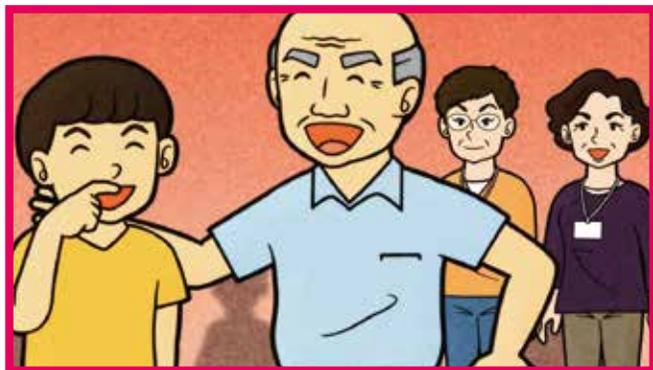


このアニメーション「未来の暮らし 創るのはわたしたち」は、災害公営住宅が建設される周辺地域の人と入居する人とは、ともに新しいまちづくりを進める

ときのきっかけづくりとしてご活用いただきたいと思います。製作しました。それぞれの場面の要約をご紹介します。それぞれの立場で、自分は新しいまちづくりで何ができるのか、DVDを見ながら一緒に話し合ってみましょう。
なお、アニメーションはCLCのホームページ (<http://www.cic-japan.com/>) からご覧いただけます。

第2幕

「ここも故郷」



災害公営住宅に引っ越した太郎さん。荻田町の人たちがつくった、まちのマップを受け取りました。荻田町のよさと、引っ越してくる人のふるさとの良さを伝え合おう、という企画です。新たな出会いや、まちの人の心づかいで、太郎さんは、元気を取り戻します。その様子を見て、仮設住宅と災害公営住宅の支援員は、ほっとした表情を浮かべました。



ここまで見た感想を自由に話し合しましょう。

第3幕

「新たな第一歩」



太郎さんが入居して3か月がたったころ、荻田町・災害公営住宅集会所では、毎週、お茶っこ（お茶会）が開かれています。常連になった太郎さんは、その日姿がみえない長谷川さんの家を訪ね、支援員と一緒にピンチを救いました。このことをきっかけに、太郎さんも、一人暮らしの高齢者や、閉じこもりがちな人の見守りや、支え合いの活動に、進んで参加するようになりました。



ここまで見た感想を自由に話し合しましょう。

阪神・淡路大震災の 経験を活かして



永坂美晴
明石市望海地区在宅
介護支援センター
センター長／兵庫県

阪神・淡路大震災では、支援者が災害公営住宅への引っ越しを急ぐあまり、入居予定者の新たな生活への不安や心の揺らぎに配慮ができず、また災害公営住宅での支援につなげることもせず、仮設住宅の退去が支援の切れ目となったことを反省しています。あれから20年経ち、地域でさまざまな支え合い活動をしている人たちは一様に、「震災、仮設住宅が活動の原点。人を受け入れる、人と関わることを始めた時期」と振り返ります。

震災が、人々の地域で生きる力を引き出しました。東北でも、人と関わる場をたくさんつくってほしい。ちょっとした挨拶や立ち話、ベンチでの会話から人はつながり、まちづくりに広がります。

- ※「未来の暮らし—創るのは私たち」(9～29頁)は、全国コミュニティライフサポートセンター (CLC) の平成 25 年度宮城県震災復興担い手 NPO 等支援事業「ガイドブック 災害公営住宅ができた！」に掲載した「未来の暮らし—考えるのは私たち」をもとに加筆・修正をしました
- ※「阪神・淡路大震災の支援から学ぶ 30 年先の地域づくり」(31～50頁) および教材アニメーションは、全国コミュニティライフサポートセンター (CLC) が独立行政法人福祉医療機構 平成 26 年度社会福祉振興助成事業を受けて作成しました。
- ※「ここが、私の生きる場所」(53～73頁)は、全国コミュニティライフサポートセンター (CLC) が平成 27 年度岩手県仮設介護・福祉サービス拠点づくり事業「高齢者等サポート拠点職員等研修」のテキストとして作成しました。

この冊子は、独立行政法人福祉医療機構
平成 28 年度社会福祉振興助成事業を受けて作成しました。



マンガでわかる 災害時における転居の課題と 地域コミュニティづくり

2017年3月

編・発行：熊本地震・共同支援ネットワーク

事務局：特定非営利活動人全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1F

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

<http://www.clc-japan.com/>

編集協力 七七舎／表紙デザイン 石原雅彦

表紙絵 スプラウトデザイン

印刷 モリモト印刷(株)